# 翼を広げて、一等星のその先へ

笹の船

## 【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

人間だった前世の記憶を持ったウマ娘が、名バ達にレースでわからせられたりリベンジしたりして夢に向かって走るお話

※史実は無視します。また、作者は競馬ミリしらです。

アプリ時空を下地に色々やっていく予定。

主人公ソライロツバサの大体のイメージ（ＮｏｖｅｌＡＩにて生成

# 目　次


ソライロツバサ ―― 1
遠い遠いあの空に輝く星 ―― 5
夢を胸に ―― 11
今日も朝が来る ―― 17
先を行かれて ―― 23
遠のく一等星達 ―― 25
一等星との遭遇 ―― 29
輝く未来を信じ続ければ、いつかきっと ―― 33
それでも、その手を伸ばさずにはいられない ―― 41
怯えるワタシ、猛る私 ―― 46
圧倒的な実力差 ―― 51
眩しい二等星たち ―― 56
悔しさを胸に ―― 61

# ソライロツバサ

どうやら私は異世界転生なるものをしたらしい。
というのも、今の私には持っているはずのない誰かの記憶が頭の中にあるから。
だから、私が前世を持っていてそして今の世界はその記憶にある世界とは違うということが分かったんだ。
ぐっぐっと体をほぐしながら、髪が乱れてないか手櫛で少し整える。
その時、頭のてっぺんにある耳に指先がかすめて少しくすぐったかった。
きっと鏡を見れば栗毛の髪の毛が映るはず。私はそれをポニーテールにまとめている。これが一番楽だからね。
視線を下におろす。真っ白な体操服に8番と書かれたゼッケンと空色のハーフパンツ、それから運動靴が目に入る。
あと見下ろした時に見えた体についてだけど、中学生にしてはまあ……出るとこは出て引っ込むところは引っ込んでるんじゃないかな。
その場で軽く屈伸。尻尾が地面にこすれるのが嫌なので、膝を曲げた時は尻尾に軽く力を入れて持ち上げる。
……そう、尻尾だ。前世で言うところの『うま』のソレにそっくりな尻尾である。
前世、種族人間。職業会社員。名前は分からない。
そして記念すべきセカンドライフでは――
「8番、ソライロツバサ！　気合は十分とばかりに伸びをしてゲートイン！　さあ、これより春の選抜レースが始まります。各ウマ娘がゲートインして今……スタートです！」
金属の柵が目の前で音を立てて勢いよく開く、と同時に足に力を込めて目の前へと飛び出した。
風を切って走る。ビュウビュウと耳にぶつかる空気の音が少し心地良い。
走る体に酸素を入れようと息をすれば、整えられた芝の匂い、そこ

に混じる前を走るウマ娘が蹴り上げた土の匂いがほんのりと香る。
そこにターフの上を走る私の、そして周りのライバル達の息遣いと足音を全身に浴びる。
どうしようもなく気持ちが高ぶる。私が求めていたものがここにある。
「いっくぞぉぉ！」
目指すは一着！
気合とともに声を上げながら、これまでよりも一際強く地面を蹴り上げて前を走るライバル達を追い抜いた。
種族ウマ娘、職業栄えあるトレセン学園生、名前はソライロツバサ。
それが第二の人生――ウマ生？――を迎えた私だ。

「ソライロツバサ、2着でゴールイン！」
「最終直線で追いつかれてからの粘りは目を見張るものがありましたが、差し切られてしまいましたね」
ゴール板を駆け抜け、息を切らしながら足を止めそうになるのを必死にこらえようと腰に手を当てながらふらふらと歩き続ける。
ダメだ、急に止まったら体に余計負担がかかるって教官が言ってたんだから。
くやしい、勝てなかった。私が、一番得意な距離だったのに。
ぜえぜえと肩で息をしながら、1着を取ったウマ娘へと目をやる。
鹿毛色の髪をポニーテールにまとめ、前髪には一筋の綺麗な白い流星がある。
私よりちょっとだけ小柄な彼女は観戦に来ていた人たちに向けて元気に手を振っていた。
「にっしし―！　ねえねえ、ボクの走りどうだったー!?」
「最高だったぞ、テイオー！」
冗談でしょ。こっちは心臓と肺が爆発するんじゃないかってくらい必死に走ったのに。
トウカイテイオー。それが私から1着をかすめ取ったウマ娘の名前だ。

かすめ取った、というのは正しくないかもしれない。
なんせ、私とあの子の着差は私の目測が間違ってなければ1バ身半……いや、ほとんど2バ身だったから。
1着を取るべくして取った、天才の中の天才。そんな言葉が私の頭の中に浮かぶ。
悔しくて、でもだからってテイオーをにらみつけるのも違う気がして視線を足元に落とす。
呼吸が落ち着いてきて止めていた私の足は、全力疾走に疲れたのかプルプルと震えているような気がした。
気を抜けばその場に座り込みたくなってしまいそうな感覚を覚えている私と、今たくさんのトレーナーに囲まれて元気そうにしゃべるテイオー。
格が違う、としか言えない。1着と2着。着順で言えばたった一つの差だけど、その間にはとてつもない距離があるように思えた。
これがトレセン学園なんだ。私は、これからあんな天才中の天才たちと走らなきゃいけない。それがトゥインクル・シリーズで走るということなんだ。
その事実に、今度こそ座り込みそうになる。これから勝てるのかな、と恐ろしくなった。
負けたらどうしよう。勝てなかったら、私は実家に帰らなきゃいけない。そんなの、とっくに知ってる。
知ってたつもりだった。でも、いざそれを突きつけられるとすごい怖い。
地元にいるお母さんたちや近所のおばちゃんたち。それから同じ小学校に通ってたクラスメイトたち。みんなからなんて言われるんだろう。
そんな想像をしたら怖くて怖くて、喉がきゅっと締め付けられるような感触がした。
前世の記憶に比べたら、今の私はずっとすごいところにいるはずなのに。あの頃に比べてずっとずっと私は特別なはずなのに。
胸がムカムカする。お腹の中の物がせり上がってきそうな感触も

してきた。
その感覚から一秒でも早く逃げ出したくて、ぐっと拳を握り締めて更衣室がある方へ走る。
スカウトしに来たトレーナー達に囲まれたテイオーを見るのも、そんなテイオーの声を聞くのももう嫌だった。
でも一番嫌だったのは――――
自分が思ったよりも特別な存在なんかじゃなかったって現実を見ることだったのかもしれない。

# 遠い遠いあの空に輝く星

いつから前世があったことを思い出したかは覚えていない。
ただ、いつからか私ことソライロツバサには持てるはずもない記憶……のようなソレが私の頭の中にはあった。
でも、ソレを異物と呼ぶにはあまりにも便利すぎた。
小学校の勉強なんて習うまでも無く記憶の中の知識としてもってたし、その他の知識も前世の記憶で大体わかった。
だから、物分りは周りに比べて頭一つ抜けていたと思う。
でも、前世の記憶が全く役に立たないことがあった。それがウマ娘の存在だ。
ウマ娘。前世の記憶だと『うま』と言う四足歩行の生き物と同じような特徴と力を持った存在……みたいだ。
代わりにこの世界に『うま』はいない。牛とかはいるんだけどね。
でもすぐにその辺りの違いには慣れた。だって私自身がそのウマ娘だったし、ウマ娘が珍しい種族でも何でもなかったから。
なんというか「ああ、そんなもんだよね」くらいの感じ。ヒトはたくましいもので、慣れないものが身近にある時間が長ければ割と適応できてしまうのである。
そんな私は小さい頃からウマ娘達のレースを観ることに夢中になっていた。それこそ前世で女の子が少女漫画にハマるのと同じように。
テレビに映るレースで走るウマ娘に夢を見た。ああ、あんなふうに色んなウマ娘と競争して勝てたらどんなに楽しいだろう！
そして私はおままごとの代わりに走ることに夢中になった。
レースで走るウマ娘達を観て憧れたし、自分もあんなふうになりたいと思ったから。
それに楽しいんだ。頭の片隅にある前世の記憶じゃ、こんなに速く走れなかった。こんなに長く走れなかった。
前世だったら２００メートルも走れば膝に手をついて息をするし、汗だくになって歩くのすらめんどくさくなってたのに。

それが今じゃ倍の距離を倍の速さで簡単に走れる。本当にどこまでも行けそうな気分だった。
もちろん、ウマ娘になったって無敵じゃないからどこまでも行けるなんてことはないだけども。疲れたら当然動けなくなる。
それでも、学校が終わった後や休みの日になったら動きやすい格好になって朝早くから家を飛び出していた。
走って走って、ちょっと離れたところまで行ってみたりとか。探検気分で裏道行って犬に追いかけられて急いで逃げて車にひかれそうになったりとか。
そういえば遠くに行きすぎたら帰り道が分からなくなって、おまわりさんにお世話になってお母さんにすっごい怒られたこともあったっけ。
後は帰り道は分かるんだけど、遠くまで行きすぎて家に帰る前に疲れて動けなくなったところを親切なウマ娘のお姉さんに助けられたりとか。やっぱりお母さんにはすっごい怒られた。
でもあのお姉さん、すっごい派手な赤い車に乗ってたなあ。見たことあった気がするけど、誰だったっけ。
それでも走ることをやめられなかった私は、とにかく走った。
そんな私が通ってる小学校で一番速いウマ娘になったのは当然だったかもしれない。
通ってる学校の誰よりも――もちろん年上の学年も含めてだ――速いって事実は私の中でも自慢だったし、でも一方でもっと速いウマ娘と走りたいって気持ちが湧いてきていた。
何より、周りからたくさん褒められるなんて経験は前世の記憶にはなかった。
それがなんだか自分がとても特別な存在になったんだ、って感じがしてすごく気分が良かった。
そして世界で私が一番速いんだ。それを証明してやるんだ。そんな根拠のない自信を胸にトレセン学園の入試を受けた。
前世の記憶もあったから学科試験はそこまで難しくなかったし、実技だって一緒に走った他の子達よりも速かった。

ただ、実技試験の時周りにいた人たちが私よりも速いタイムの子がいたって話してるのは聞いていた。
それを聞いた時は「これが全国トップの中央なんだ」とぼんやりと思うくらいだった。
だって、実際に一緒に走って負けたわけじゃなかったから想像が出来なかったんだ。なんなら一緒に走ったって勝てると思ってた。私は特別だと思っていたから。
でも、入学してからの模擬レースで初めて負けた。
悔しかった。認めたくなかった。自分がこんなところでつまづくようなヤツなんだって思いたくなかった。
だからいっぱい走って、筋トレして今度は負けないぞって頑張った。
次の模擬レースでは前負けた子に勝ってちゃんと1着が取れた。
嬉しかった。もう負けないぞと思って練習した。
けど、その次のレースではボロ負けだった。原因は距離適性ってやつだった。
私はどうやら短距離とかマイルはダメらしい。トップスピードを出すまでに時間がかかるタイプだったからだ。
逆に距離が伸びれば伸びるほど私はクラスメイトよりも速かった。私は周りの子よりもスタミナがあるから、速めにスパートをかけるといいよって教官に言われた。
そしてその通りに走ったらクラスの子たちは誰も追いついてこれなかった。
自分の武器が何か、なんとなく分かった瞬間だった。
そうして中学2年生になってから迎えた春の選抜レース。距離は２０００メートル。実際のレースでは中距離のカテゴリだ。
それでもデビュー前の私達からすると長めの距離。私にとっては一番得意なレース距離だった。
一番得意とする距離での大一番。絶対に負けられないし、それ以上に負けたくない。ゴール板を最初に駆け抜けるのは私なんだ。
そう、思っていたのに。

レースが始まってからの位置取りは上手く行って、早めのスパートをかけるって戦法も問題なく使えた。
ここまでは間違いなく思った通りに走れていたし、最終直線に入った時には逃げの子を抜いてもう一番前を走ってた。
勝てると思った。すぐ真後ろを走る足音もちょっとずつ遠くなってたし、私の足はまだ残っていたから。
なのに。
「へえ、やるじゃん！　でも――ボクの方が速いもんね！」
いつの間にか真後ろまで誰かの足音が聞こえたと思ったら耳に飛び込んできたそんな言葉。
誰の声が、とかなんでそこに、とかそんなことは頭から吹っ飛んだ。
ただ、カッと頭に血が上ったような感じがしてもっとスピードを出さなきゃ！　とがむしゃらに足と腕を動かした。
結構スピード上がったと思う。まだこんなに動けるんだ、なんて他人事のように感じながら必死で走る。
でも、残り２００メートルのハロン棒を超えるその瞬間に私の真横にソイツが来た。
その瞬間、足と腕にもっと力を込めながら知らず知らずのうちに声を張り上げていた。
「ッ……ぁぁぁぁぁぁぁぁ!!」
もっと、もっとスピードを！　もっと出せ！　コンマ１秒でも早く、１センチでも前に足を出せ！
負けるもんか負けてたまるか私よりも前になんて行かせるもんかッ！
「ッ!?」
一瞬、隣で息を呑む音が聞こえた。どうだ驚いたか！　絶対に一着は譲ってなんかやらない！
……なんてことを、並んだくらいで思っちゃったから私は負けたのかもしれない。
「そうこなくっちゃ！」
「えっ」

こっちは全力も全力。これ以上ないってくらい力を振り絞って走ってた。
でも、隣のソイツはそこからさらに加速していく。
奥歯を思いっきり噛みしめて腕を、足を動かすけどソイツとの距離は離れていく。
スピードは上がらない。それどころか足から力が抜けていくような感覚すらしてきた。
それを無理やりねじ伏せてやるって気持ちで足を前に出す。これ以上離されてたまるもんか！
でも、みるみる距離が離れていく。ああ、アイツが――トウカイテイオーがゴール板を駆け抜けた。

そうして選抜レースに負けた私は今、学園の授業棟の屋上の隅に座り込んで空を見上げている。
選抜レースが終わってから大分時間が経ち、沈みかけの太陽が空をニンジンみたいな色で染ている。
ニンジンみたい、なんて考えた瞬間にお腹から気の抜けた音が鳴った。
「……お腹すいたな」
ボソリとそんなことを呟いてみるけど、立ち上がる元気は沸いてこない。
時間も時間だし、寮に行けば夕飯の準備も始まってると思う。学園と寮は道路一つ挟んですぐだから、すぐに行ける距離だ。
それでも、なんだか立ち上がってそこまで行くっていう気分にはならなかった。
選抜レースは年に４回しかない。ここで負けた以上、次にあるとすれば夏だ。
それまで３か月くらい。それだけあれば、今度は１着を取れるのかな。そうしたら私にもトレーナーがついてもっと速くなれるのかな。
３か月。その期間で、教官や自主練だけであのテイオーの前を走れるようになるのかな。

今日のテイオーは本当に凄かった。あの選抜レースでは、テイオーだけがキラキラ輝いていた。
暗くなってきた空にちょうどひときわ明るく輝く星みたいに。
なんとなしにその星に向かって手を伸ばす。星が手に隠れてから、ぐっと握ってみる。
……何も感じない。爪が手のひらにちょっと食い込んだ感触だけだ。
空は遠い。見上げればすぐそこにあるのに、手を伸ばしたって全然届かない。星ともなればもっともっと遠い。
なんだかとても虚しくて、腕を太ももの上にぽてっと落とした。
それと同時くらいかな。屋上の扉が開けられた音がした。
「お、いたいた。どしたのー？　ずいぶんとアンニュイな顔しちゃって」
扉の方から聞きなれた声が耳に飛び込んでくる。
声のした方向へと顔を向ければ、そこには癖のある髪の毛をツインテールにしたウマ娘――ナイスネイチャが微笑みながらこっちに向かって歩いてきているところだった。

# 夢を胸に

ナイスネイチャは入学した時のクラスメイトだ。今年の春にクラス替えがあった時、別々になっちゃったけど。

面倒見が良くて、どちらかと言うとツッコミ体質。癖とボリュームのある髪をツインテールにしてて、触るとちょっと楽しい。

寮も同じ栗東で、結構一緒に喋ったり登下校してたりする。

だからかもしれない。誰にも居場所を教えてないのに、屋上にいる私を見つけられたのは。

「ネイチャ……」

「もうそろそろ夕飯の時間なのに、ツバサがいないってテイオーが騒いでたよ？」

「テイオーが？」

そういいながらネイチャが私のすぐ隣に座る。

それにしてもまさかここでその名前を聞くなんて。っていうか、何でテイオーが私を探しているんだろう。

「なんでまたテイオーが私を？」

「んー？　今日のレース、一緒に走って楽しかったからまたやりたいって言いたかったんだってさ。……いやー青春してますなー」

「なにそれ……私は死ぬ気で走って負けたのに」

「うん、見てたよ。アタシ、その次のレースだったしね」

見てたんだ。なんだか、走り終わった後の自分の姿を見られたって思うと恥ずかしい。

「……ネイチャはどうだったの。選抜レース」

恥ずかしさと気まずさを誤魔化そうとネイチャのレース結果を聞いてみれば、ネイチャは困ったような顔で髪の毛をいじり始めた。

「いやー、まあいつもの3着だったかな。あんなの見せられた後だったし、アタシもやってやるぞ！　って結構気合入ってたんだけど、さ」

アハハ、やっぱ脇役なんてこんなもんですヨ。なんて肩をすくめながらネイチャは笑った。

そんなネイチャから目をそらして膝を抱える。スパッツがあると

はいえ、むき出しの太ももにはまだちょっと今日の風は冷たい。
「ネイチャはさ」
「んー？」
「……悔しくなかったの？」
我ながら酷い質問だと思った。レースに負けて悔しくないなんてウマ娘は、この学園になんて入ってこないのなんて周りを見れば誰でも分かるから。
それでも……いや、だからこそ聞きたかった。悔しいって思うのが普通なんだって、私だけじゃないんだって安心したかった。
だって、テイオーに負けてターフから逃げる前に聞こえたんだ。他のウマ娘が「テイオーが相手じゃ仕方がないよね」って笑ってるのが。
そんなことを言いたくなるくらいにテイオーは強いと噂されてたし、実際強かった。そんなの、負かされた私だってよく分かってる。
それでも、私は勝てると思ってた。負けたくないって思ってた。
なのに負かされて、悔しいと思ったんだ。でも、他のみんなは違ったみたいで、私がおかしいのかなって不安になった。
テイオーに負けて悔しいなんて考えるのがバカなのかなって。だけど、そんなことは信じたくなかった。
私が本物の天才に勝てるなんて思う資格すらない脇役だなんて、そんなの信じたくない。
そんな私の願いは叶ったのかどうなのか。
「……じゃん」
「え？」
「悔しくないわけ、ないじゃん」
俯いて、風の音にもかき消されそうな小さな声でネイチャはそう呟いた。足の上に置かれた手はギュッと制服のスカートを握りしめてる。
「私だって勝ちたいよ。商店街のみんなが応援来てくれてさ、頑張れよって言ってくれて。素晴らしい素質なんて名前負けしてる才能しかないかもしんないけど、それでも応援されたんだよ。かっこいいとこ、見せたいじゃん。みんなの応援は意味あったんだよって、言って

あげたかった……」
　そこまで一気に言い切って、ネイチャは息を大きく吸い込んでから吐き出す。スカートを握った手は、ちょっとだけ震えてた。
「……ごめん。酷いこと言った」
「え、あー。……ううん。いいよ。アタシだってレース終わった後のアンタの姿見てたのに、脇役とかなんとか言い訳するなんて無神経すぎたし……」
　そんな風にお互い謝り合って、その後は二人とも黙ったまんまちょっと気まずい時間が流れる。
　何とも言えない時間にムズムズして視線をあっちこっちに動かしていると、ふとネイチャと目が合った。
「……っぷ！」
「……ふふ！」
　なんだか急におかしくなってきて、二人して噴き出す。
　それから声を上げて一緒に笑った。理由はよくわかんない。でも、なんかおかしかったから笑えた。
　ひとしきり笑った後、ふとネイチャが真面目な顔になった。
「テイオーみたいに行かないかもだけどさ。やっぱ、なりたいんだ。私もキラキラに」
　そう決意を口にしたネイチャの顔はとても綺麗で、なんだかちょっと見とれてしまった。
「……ちょっとー？　あんまりそうやって見られると、恥ずかしいんだけどー？」
「えっ、あっごめ……いたぁ!?」
　ほんのり顔を赤くしたネイチャが頬を膨らませながらこっちに手を伸ばしたかと思ったら、おでこにぺちっとデコピンをされた。
「デコピンすることなくない!?」
「うっさい！　て言うか、ツバサはどうなのよ？」
「どうって……何が？」
「何って、夢！　アンタだってなんか夢があってトレセン学園来たんでしょ？」

夢、か。そう言われて思い出すのは、トレセン学園に入学する前に地元を離れるときの事だ。
『私、最強になってくるから！』
地元じゃ負けたことなんてなかった。だから、なんの疑いもなくそうなれるんだと、なってみせると見栄を張ってこっちに出てきた。
でも、現実はこれだ。私よりもずっと速い娘がいる。きっとこれからもテイオーみたいなのと走ることになると思う。
私は、私が思うほど特別じゃないかもしれない。今日みたいに負けること、これからもあるのかもしれない。
だからもう、あの頃みたいに無邪気に『最強になる』なんて言えない。
だけど、それでも！
負けっぱなしなんて絶対に嫌。そりゃどんなウマ娘にも勝てるなんてもう思えないけど、でも一緒に走る以上誰にも1着は譲りたくない。
私がわたしであるためにも、これだけは譲りたくない。
そう思いながら拳を握りしめて、私は立ち上がる。顔を上げればもうたくさんの星が空に浮かんでいた。もう辺りは暗くなっている。
「私はね、ネイチャ」
「うん」
見上げた空に輝く一際明るい星を真っ直ぐ見つめながら、小さく息を吸って私の夢を言葉にする。
「最強になりたい。誰にも前を走らせたくない」
「おお。大きく出たねー。行く道は険しいぞー？」
そういってからかう様に――でも嫌味っぽさは全然感じない――笑って立ちあがったネイチャを肘で小突く。
「何言ってんの。ネイチャだって私と言ってることあんま変わらないじゃん」
「いや、流石に最強はちょっとネイチャさんには荷が重いかなって」
「じゃあ私ネイチャよりキラキラして目立っちゃおっかなー」
「あー！　そういう意地悪なこと言う!?」

「あはは！　それが嫌だったら私に負けなきゃいいんだよ」
「なっ……あー、もう。そういうの、私のキャラじゃないんだけどなぁ……」
なんて困ったようにツインテールをイジるネイチャだけど、その目だけは鋭い光を宿している。
なんだかんだ諦めてるようなことばっか言ってるけど、この子も結構な負けず嫌いだよね。そういうところが好きなんだけど。
そんな事を考えてるとネイチャが小さくため息をついて、それからまっすぐ私の目を見つめてきた。
「次、同じレースに当たったらそん時は恨みっこなしだかんね！」
明確な宣戦布告。私が夢見たライバルとのレース。
それが出来ると分かって、無性に嬉しくなった。そうだ、勝つだけじゃない。
私は、こういうことを夢見てここに来たんだ。
でも、ライバルとレースするだけじゃ物足りない。やるからには絶対勝ちたい！
だから、私はネイチャの目をまっすぐ見つめ返して答えた。
「もちろん！　あ、でも勝つのは私だけどね」
「なにおう！　次のネイチャさんは一味違うぞー？」
そういって腰に手を当てて顔を突き出すような格好をしたネイチャが唇をキュッと結ぶ。
それに対して、私は腰に手を当てて胸をそらして見下ろすような格好をした。
「ふふん！　テイオーに張り合った私は結構強いぞー？」
「でもアンタ最後一気に離されたじゃん」
「あー！　それ気にしてるのに言っちゃう!?」
「自分でネタを振るからだよ。それに、私も末脚にはちょっとだけ自信あるんだよね。……うっかりしてると競り合う前に差し切っちゃうぞ？」
「ネイチャこそ、末脚で刺そうと足溜めすぎて気が付いたら追いつけないとかになっても知らないよ？」

そんなくだらない言い争いをしていると、不意に屋上の入り口から咳払いが聞こえた。
「もう完全下校時間だぞ。いつまでそこで遊んでいる」
「げっ、エアグルーヴ副会長……」
「ずいぶんな挨拶だな、ソライロツバサ？」
そこに居たのはキレイに切りそろえらえたボブカットヘアに紅いアイシャドウが特徴の美人なウマ娘。
トレセン学園の生徒会で副会長を務めるエアグルーヴ先輩だった。
この人には前に朝の自主練で遠くに行きすぎて帰ってこられなくなった挙句、先生に迎えに来てもらう羽目になった時こってり絞られた。
それ以来、なぜか妙に目をつけられているというか……何でよ一回だけじゃん！
「次学園の教員を迎えに行かせるようなことがあれば、お前は朝練禁止だからな」
「人の心読まないでくれます!?」
「……顔に出ているんだ。全く、これ以上目をつけられたくなければ早く寮に戻れ」
やれやれとため息をつかれるのはなんだか納得がいかないんだけども、これ以上目を付けられるのも嫌なので大人しく従うことにしよう。
「ネイチャ、帰ろっか」
「うん。そだね」
「まっすぐ帰れよ？」
本当に大丈夫なんだろうな、と言いたげな視線でこちらを見てくるエアグルーヴ副会長にちょっとだけムッとして足を止める。
「言われなくてもまっすぐ帰りますー！」
そう言うのと同時に副会長に向かってあっかんべーをしてから、ネイチャの手を引いて私は小走りで寮に向かって校舎を駆け抜けたのだった。

# 今日も朝が来る

ふと気がついた時、私は不思議な空間に立っていた。
どこまでも続く草原と、青く澄み渡った空。
いつもの私なら大喜びでその果てに向かって走り出してたと思う。
けれど、私はそうしなかった。出来なかったといったほうが正しい。
何故って、私の体は指一歩動かせなかったから。
そこで、私はこれが夢なんだってことに気がついた。
そして、私の目の前には女の人が草原にポツンと置かれた椅子に座っていた。
きっと、この夢はこの人とお話するのが目的なんだ。どうしてかそう思った。
それはそれとして目の前の女の人を人、と言っていいのかは分からない。
何せ私の目の前の女の人は真っ白なシルエットをしていたんだ。
真っ白な紙に書き起こされた架空の存在が色をそのままに実体を持って現実に飛び出してきた。そんなふうに説明した方がすんなり納得できそうなくらい真っ白だった。
だけど、不思議なことに体つきと口元は見て取れた。かろうじて女の人って分かるくらいだけど。
そしてこれまた不思議なことに目元だけは元々ないのか、ボヤケているのか……とにかく見えなかった。
『頑張って』
どこかちょっと嬉しそうな、それでいて羨ましそうな声でその人は言う。
あなたは誰、と問いかけようにも私の口はボンドでくっついたみたいに動かない。
『あなたはどうか、夢を諦めないで』
言われなくても諦めるつもりは無い。夢を現実にする為に、私はトレセン学園に来たんだから。

だから、もちろんだよと伝えたかったけれどもやっぱり私の口は動かない。
それならとジェスチャーをしようと思ったけど、相変わらず体はピクリとも動かない。まるで、私の体じゃないみたいだ。
どうにか体が動かせないかなって頑張っているうちに、目の前の景色が溶けていく。
待って、と声を上げる前に私の意識も薄れていった。

ぼんやりとした意識が段々とはっきりしてくる。
もう見慣れた寮の天井が視界に入ってきた。
枕元に置いてあったスマホを手に取ってボタンを押すと時計が表示される。
朝の４時４０分。目覚ましが鳴るまでまだちょっとある。
なんだかとても変な夢を見た気分だ。誰かに何かを言われた夢。
あれは一体何だったんだろう？
寝起きでぽやぽやした頭だと考えもまとまらない。
まあ夢のことだし、あんまり気にしなくてもいいかな。
そう考えていると隣のベッドからもぞもぞとした音が聞こえてきた。
「んー……ツバサ？　はやいね……」
ボサボサになった青鹿毛色の髪をガシガシとかきながら、そのウマ娘は開き切らない目で私を見て笑った。
「おはよ、フー」
まだ眠そうにしてる同居人の姿に思わず頬が緩む。
こんなふにゃふにゃした雰囲気の娘が私のクラスの学級委員を努めてるんだから、世の中分からないものだよね。
とりあえず、目も覚めてしまったのでのそのそと掛け布団を体から引き剥がしてベッドから降りる。まだこの時期の朝は肌寒い。
思わず腕を抱くようにして寒さを和らげようとしながら、廊下に出て洗面所に向かう。
選抜レースの日から数日後。

私は学校の授業が終わってから毎日のように走り込みをしていた。
テイオーに負けてから、私に何が足りないのかと色々考えてみたけど、やっぱりスタミナが足りなんじゃないかって思った。
トップスピードを上げるのも大事だとは思うんだけど、自分ひとりの練習じゃ何ともならない。
走るだけなら一人でもできるけど、速く走ろうとするんだったら私は近くに他の娘がいたほうがやりやすいから。
そう言えばテイオーはトレーナー決まったんだっけ。私も早くスカウトされるように頑張らないと、どんどん置いてかれちゃうよなあ……。
そんなことを考えていると最寄りの洗面所についた。まだちょっと朝早いからか、洗面所には誰もいない。
待たずに顔を洗えるって気持ちいいなー、なんて考えながら水を出そうと蛇口に手を伸ばして、一瞬手を止めた。
それからやっぱり、と思い直してからお湯が出る方の蛇口を開ける。冷たい水の方が目は覚めるだろうけど、温かいお湯の方がこう……安心するし。
気持ちのいいお湯で顔を洗うと、ぽやぽやしてた意識がちょっとシャキッとした。
蛇口を閉めて持ってきてたフェイスタオルで顔についた水分を拭く。噂じゃフカフカソムリエ？　とか言う人イチオシらしいタオルだけど、去年からずっと使ってるから今はそこまでフカフカじゃない。
タオルから顔を上げると、洗面所の鏡の中から私が私のことを見ていた。
お母さん譲りのスカイブルーの瞳に、鎖骨にかかるかどうかくらいの長さのボサボサになった栗毛色の髪。うーん、この髪じゃとても人前に出れないや。
でもまあ、どうせ部屋に戻ったら櫛で整えるつもりだしここで直さなくてもいっか。めんどくさくて後回しにしたとも言う。
洗面所を出て、自分の部屋に戻る。

部屋に入るとルームメイトのフー――フードゥルアルクがボーッとした様子のままベッドに座っていた。
朝に弱いフーはどうしたって動き出すまで時間がかかる。フーが恥ずかしがるからあんまり人には言わないけど、普段の優等生でしっかりものな彼女の姿を知ってるとなんだかギャップですごく可愛く見えるんだよね。
ちょうどその時、私の枕元に置きっぱなしにしてあったスマホから朝5時を知らせる爆音の目覚ましアラームが鳴り響いた。
「ふぎゃあ!?」
おっと、ぼーっとしていたフーにはすっごい効いたみたい。座った姿勢のまま真上にちょっとだけ跳ね上がってるの面白いな。
思わずくすくすと笑いながらスマホに手を伸ばしてアラームを止める。
「おはよう。目は覚めた？」
「……見なかったことにしてくれる？」
「今日のお昼にデザート譲ってくれるなら」
「えー！　今日はひとくちチーズケーキだから絶対嫌！」
耳を絞って睨みつけてくるフーに冗談だよと笑いながらパジャマを脱ぎ捨てる。
うー、やっぱまだ寒いな。早く体操服着ちゃわないと。
「……ねえツバサ」
「なーに？」
寒い寒いと思わず漏らしながら体操服を着て、その上にジャージを羽織っているとなんだか難しそうな顔をしたフーがこっちを見ていた。
「走りに行くのはいいけど、髪の毛ぼさぼさだよ？　そのまんま外行くの？」
あっ、すっかり忘れてた。さっきまで部屋に戻ったら梳こうと思ってたのに。
「忘れてたんでしょ。……ほら、やってあげるから」
「フー？　私、それくらいは自分でできるんだけど……」

むしろ状況的にフーの方が私にやってもらった方がいいんじゃないかな。
どうせまだちょっと眠たいんだろうし。
なんて思いながらフーの隣に座っちゃうのは、まあほらやってくれるならやってもらった方がね？
「全く……ツバサは適当すぎるからダメだよ？　せっかくきれいな髪なのにもったいないって」
「ちゃんとトリートメントとかは使ってるんだけど」
「それじゃ足りないよ。もっと普段からお手入れしないと」
「えー」
そんなことをする暇があったら走りたい。
「レースに出たらライブにも出るんだよ？　なるべくキレイな方がいいでしょ？」
「そもそも勝てなきゃ出れないでしょ」
「……一応、バックダンサーとかもあるから」
「あれは……どうせ誰もそこまで見ないよ」
「ファンの人達は見てくれるよ」
どうだろう。お母さん達は私を見てくれるだろうけどテレビ越しだろうし。髪とか分かんないんじゃないかな。
「ん。髪、梳かし終わったよ」
「ありがとフー。じゃあ私ちょっと行ってくる」
「ちゃんと学校始まるまでに帰っておいでよ？」
「フーまで副会長みたいなこと言う！」
あはは、と笑うルームメイトに対して頬を膨らませながらバッグを肩にかける。
窓から差し込んできた朝日の光が目に入って思わず目を細めた。
「今日もいい天気だね。走ったら気持ちよさそう」
「……ホントにちゃんと帰ってきてよ？」
「フー、それもしかして……フリ？」
「そんなわけないでしょ！」
「あはは！　それじゃあ行ってきまーす！」

ちょっと！　と制止する声を振り切って部屋を飛び出す。
さあ、今日もいっぱい走るぞー！

## 先を行かれて

「ソライロツバサさん。……ソライロツバサさんはいませんか？」
「ハァイ！　ここにいまぁす！」
　あらん限りのスピードで学園の廊下を歩いていると私のクラスから自分の名前が呼ばれるのが聞こえたから、これはヤバいとダッシュして勢い良く教室のドアを開けた。
　危ない。危うく遅刻するところだった。なんとか出欠確認には間に合ったからセーフ！
「ま、間に合った……」
「始業のチャイムに間に合ってないからアウトですよ。朝の自主練はしばらく禁止です」
「そ、そんなぁ……」
　先生の残酷な有罪判決に耳と尻尾が力なく垂れていくのを感じた。
「……ってことがあったの！　いいじゃん出欠確認には間に合ったんだから！」
「いや、ダメに決まってるでしょ」
　昼休み、私はカフェテリアでお昼ごはんをかきこみながら今朝の有罪判決に対する愚痴をネイチャにこぼしていた。
　そんな私を見てネイチャは苦笑いをするだけだ。
「走るのが好きなのはわかるけどさー。学校生活もちゃんとしないと先生に目ぇつけられて大変だよ？」
「あれ、ネイチャって小学校の頃にヤンチャしてた感じ？　意外かも」
「いや、ヤンチャした結果が目の前にいるから反面教師にしてるだけ」
「ひどーい！」
「事実じゃん」
　私、ソライロツバサは激怒した。必ずやかの邪智暴虐な親友をこらしめねばならぬと決意した！
　決意したのでネイチャのお皿に残っていた最後のニンジンをお箸で摘んで口に放り込む。

「あーっ!?　ちょっとツバサそれは反則でしょ!?」
「んむふふふふ♪」
うん。今日も学食のニンジンは甘くて美味しい。あ、待ってネイチャそんなに揺さぶらないで食べたものがが！
「ヒドイ目にあった」
「自業自得でしょ」
空の食器を乗せたトレーを返却口に置きながらため息をつく。
本当に危なかった。あともう少しで食べたものが逆流するところだった。
さて、今日は午後からレース座学だったけか。面倒くさいけど、受けとかないとレースで勝てないからな……。
まあ、午後のレースクラスはネイチャと一緒だし最悪教えてもらおうかな。
「ネイチャ、この後はレース座学だったよね」
何の気なしにそんなことを聞いてみれば、ネイチャの動きがぎこちなくなった。
「ん？　どうしたのネイチャ」
「あ、いやぁ……その、ですね」
もじもじし始めたネイチャを見て、なんとなく気づいた。もしかして……。
「アタシ、実はトレーナーさんと契約しまして……」
分かってた。分かっていたけど、それでもやっぱり衝撃は大きくて。
「え、ええええええええ!?」

# 遠のく一等星達

ネイチャにトレーナーが付いた。別に驚くようなことじゃないはずだ。

アタシは脇役だから、なんてどこか諦めたようなことを言う子だけど影で努力してたのは知ってる。

選抜レースでは3着だったって話だけど、それでもトレーナーと契約が出来たってことはきっとそれだけの何かがあったってことなんだと思う。

喜ぶべきこと、のはずだとは思う。親友がようやく夢のスタートラインに立てるんだから。

でも、それでも……。

「……私って、ヤなヤツだな」

ネイチャからトレーナーとの専属契約を結べたと教えてもらった時、私は驚いて大声を出しただけだった。

その後はなんて言えばいいかも分からなくて、契約したの？　と聞き返すのが精いっぱいだったような気がする。

あれからいつの間にか放課後の時間になったけど、それまで自分がどうしてたかはよく覚えてない。

ただ、これからどうしたらいいんだろうって気持ちでいっぱいだった。

自主練とかはネイチャを誘ってやるつもりだったし、一人でやるなんてこれっぽっちも考えなかった。

朝は一人で走ってるけど、アレは体力づくりのランニングだ。誰かと一緒にやるようなものじゃない。

同室のフードゥルアルクはまだ本格化も来てなさそうだし、何より学級委員の仕事も忙しそうにしてる。

あの子に予定を合わせるのは私がつらいし、私の都合にあの子を付き合わせるのも違う気がしてる。

それに、私はあの時誰からも声を掛けられなかった。あのテイオーに負けたとはいえ、そこまでボロ負けした気はしないんだけどそれで

も声はかかってない。
だけど、3着だったネイチャはトレーナーと契約が出来た。
何が違ったんだろう？　私になくて、テイオーやネイチャにはあったモノって何なんだろう。
私からすれば、ネイチャだってもう十分キラキラの一等星だ。それに引き換え、どのトレーナーから声を掛けられることもなかった私は大して輝きもしない星屑でしかない。
「ダメダメ。こんなこと考えてないで練習しなきゃ」
両手でほっぺをパチンと叩いて気合を入れる。
今がダメなら、明日は今日より強くならなきゃいけない。
脇役が主役になれないなんてことは、無いはず。いや、無かったとしてもやってやる。
私は『最強』になるって決めたから。こんなところで立ち止まるわけにはいかない。
「よし、やるぞ」
そうだ、勝つんだ。ネイチャにも、テイオーにだって。
今度こそ、誰にも負けないように。

放課後の自主練を終えて部屋に戻ってくる。
ルームメイトのフードゥルアルクはいない。きっとご飯を食べているかお風呂かなんだろう。
ネイチャがトレーナーと契約を結んでからずっと心の中にあるモヤモヤを忘れたくて険しい坂道だったり、近くの神社の階段を駆け上がったりとにかくずっと動き回っていたからもうへとへとだ。
お小遣いで買った自分用のストップウォッチを机に放り投げて、ベッドに腰を下ろす。
ストレッチはしっかりやったけど、疲れすぎたのか体中がずっしりと重たくてこれ以上動く気になれない。
たまらずそのまま仰向けにベッドへ倒れこむ。もうそれなりに見慣れた部屋の天井には何もない。
まあ、寮生活なのに天井にポスターとか暗くなるとぼんやり光る

シールみたいなのを張るわけにもいかないから当たり前なんだけども。

……私は、強くなれるかな。まだ次の選抜レースまでは時間がある。だからそれまでにいっぱい走って、筋トレして、勉強して……。

でも、その頃にはテイオーやネイチャはトレーナーに色々指導してもらえる。下手したらデビューして本物のレースを経験できる。

ただでさえ元々の才能で負けてるのに、出遅れスタートして追いつけるのかな。

このままじゃあ、またなんてことない平凡な人生を送ることになっちゃう。それは嫌だから、私は勉強とかも頑張ってトレセン学園まで来たっていうのに。

このままデビューもできないで大人になったら、私はどうやって生きたらいいんだろう。

そんなことを考えていたらなんだか眠たくなってきた。お風呂にも行ってないから絶対汗臭いし、夕飯も食べてない……。

分かってるんだけど、体は動かない。いや動きはするかもしれないけど、体に力を入れられないというか、体を動かすだけの気力がわいてこないというか。

ああ、でもシャワーくらいには……。なんてことを考えながら私はゆっくりと目を閉じた。

ふと、私は自分が澄み渡る青空がいっぱいに広がる草原に立っていることに気が付いた。

なんだか、前にこんな光景を見たような気がする。

そこで、私は目の前に女の人がいることに気が付いた。

女の人、と言ってもなんか真っ白なシルエットがこっちを向いて座っているのが見えてるだけだ。でも、何でか私はそれが女の人ってことが分かった。

そして、目の前の女の人はどこか心配そうな顔をしている気がした。

『焦らないで』

焦らないでいられるもんか。だってウマ娘のアスリート人生は何年あるか分からないんだから。
大体、私はみんなに最強になるって約束してきた。なのに、デビューもできないで地元になんて帰れない。
『……』
私のそんな心の中でも覗いたのか、目の前の女の人は何かを言おうとして……でも結局何も言わないでうつむいてしまった。
大体、あなたはいったい誰なの。そう声に出そうとしたけど、不思議なことに口は動かない。
それどころか指一本動かない。前にもこんなことあったような気がする。
だけど、今は体が動かないっていうのこれ以上なく不愉快だった。
体の中で何かがぐつぐつ煮えくり返ってるみたいな感覚が広がって行って、それをどうにかしたくて体を動かしたくてたまらない。なのに、指一本すら全然動かせない。
何でこんなことになってるの！　私を放してよ！
そんなことを叫ぼうにも、それも出来ない。イライラして頭がどうにかなりそうだった。
頭に血が登ってきてるのか、なんだかクラクラしてきた。
そしてそのまま目の前が白くなっていく。だけど、この胸のぐつぐつは消えないままだった。
『……ごめんね。私があなたの――』
そうして、意識が遠のく中であの女の人小さく何かを呟いていたけれど、全部を聞き取る前に私の意識はぷっつりと途切れてしまった。

# 一等星との遭遇

「うあ……!!」

自分が出した変な声で目が覚めた。気分は最悪だ。

嫌な夢を見ていたことだけは覚えているけれど、どんな内容だったかはもう思い出せない。

「あ、良かった。目が覚めたんだねツバサ。うなされてたけど、大丈夫？」

「……え？」

ゆっくりと体を起こすと、向かいのベッドの上に座ったルームメイトのフードゥルアルクが心配そうにこっちを見ていた。

というか、今気が付いたけど私の体に掛け布団がかかってる。

確か、自主練から帰ってきてすぐベッドに倒れこんで……そのまま寝ちゃったみたいだから布団なんてかけてなかったはずだけど。

改めてフーの方を見れば、彼女は自分のベッドの上で体育座りしながら壁に寄りかかって私の方を見ていた。そこに掛け布団はない。

「もう。寝るんだったらちゃんとしないと、風邪ひいちゃうよ？」

「ごめん……」

なんだか悪いことをしちゃったみたいで居心地が悪い。

だから、なんとなくフーから目をそらして窓の外を見た。

空はもう真っ暗で、部屋の明かりで見えにくいけど星が綺麗に光っている。

……ん？　外は真っ暗ってことはいったい今は何時なんだろう。

「あ！　ご飯！」

寮の夕食の時間は決まってる。ご飯の時間にいなくても残り物を寮長が冷蔵庫に取っといてくれることがあるけど、どうせ食べるならあったかい出来立てがいい。

けれど、そんな私の思いは届かなかったみたい。

「もうご飯の時間は終わっちゃったよ。夜の８時前だもん」

「そんなぁ……」

思わずがっくりと肩を落とすと同時にお腹から大きな音が響いた。

……お腹すいたな。流石に何か食べたい。
そう思ってベッドから足を下ろして立ち上がる。また大きな音がお腹から響いた。恥ずかしいから少し大人しくしてくれないかな……。
誤魔化すようにフーがかけてくれていた布団を持って差し出す。
「しょうがない。冷蔵庫の余り物探してくる。そうだ、布団ありがとね」
「どういたしまして。ほら、早く食べに行きな」
「うん。そうする」
フーにそう言われて、早歩きで部屋を出て共有冷蔵庫のある場所へと向かう。
寮の中にはこれからお風呂に行くウマ娘や、夜の自主練に向かうか帰ってきたウマ娘がちらほらいた。
……ここのウマ娘たちはみんな真面目だ。勉強はともかく、速くなることを望まない子はいない。
それでも、本当に速くなれるウマ娘はほんの一握りだ。
ダメだな。いやな夢を見たせいか、とにかく気分が沈む。変にお昼寝みたいなことしちゃったからか、体もだるい。
いやなことにどんどん考えを巡らせそうになるのを必死に我慢しながら、それでも何とか共有冷蔵庫にまでたどり着いて、冷蔵庫を開ける。
中には名前が書かれた飲み物とか食べ物もいっぱいあったけど、一番手前に「夕飯を食べ損ねたポニーちゃんへ」と綺麗な字が書かれた付箋が貼られたパックがいくつか置かれていた。
中身は……おにぎりがいくつかとサラダ、それからから揚げだ。
あ、口の中でよだれが……。
こういうパックは一人一個までなら好きに食べていい。勿論、夕飯を食べ損ねた子用だけど。
またひときわ大きな音でお腹が鳴った。なんでもいいから早く食べよう。もう限界だ。

冷蔵庫に入っていたご飯はあっという間に食べ終わった。あったかくなくても美味しかった。作ってくれた人ホントにありがとう。
そんなことを考えながらパックを綺麗に流し台で洗って片づけた後、私は一回部屋に戻ってすぐに廊下に出た。
今度はお風呂に入る為だ。自主練から帰ってきた後、シャワーも浴びずに寝ちゃったからね……。
フーは何も言わなかったけど、多分今の私結構汗臭い。
それは私も嫌だし、何より体がベタベタしてる気もしたから早くさっぱりしたかった。
そういうわけでそそくさと脱衣所に入って服を入れる籠の前で服を脱ぐ。
裸になってお風呂場に入ってみたら、運が良いことに誰もいなかった。
「おー、貸し切りなんてラッキーかも」
誰もいないお風呂場に私の呟きが響き渡るのを聞きながら、シャワーで体を念入りに洗っていく。
温かいお湯で体を洗うと、体についていたベタベタが取れていくような感じがして気持ちがいい。
そうして一通り髪と体を洗い終わった私はバレッタで髪がお湯に浸からないように留めてから、フェイスタオルを頭に乗っけて湯船にゆっくりと体を沈めた。
「ふぅー……」
じんわりとした温かいお湯に体を沈めると、思わずゆっくりと肺の中にある空気を全部吐き出してしまう。
そうしてお湯に浸かりながら頭の裏に浮かんだのはこれからのこと。
テイオーは勿論、ネイチャもトレーナーが付いた。私も早いところトレーナーを見つけないと、二人に離されちゃう。
でも、どうしたらいいんだろう。次の選抜レースまでは大分時間がある。それまで自主練をしたとしても、私一人でできることなんて大したことない。

自然と視線が下を向いていく。透明なお湯越しに私の体が見えた。具体的にはこの一、二年で大きくなってきた胸が見える。
そういえば、胸って大きいと浮くんだっけ。
なんてことを考えながら、なんとなしに両手で胸の下の方を持ってみる。重くなかった。
「おお……浮いてる……」
ホントにお湯に浮いた胸の下側をタプタプして遊びながら、思わずそう呟いてしまった。
トレセンに来てからゆっくり考え事をしながらお風呂に入るなんてこと、そう言えばしたことなかったな。
だから自分の胸が浮くかどうかとか考えたこともなかったっけ。
まあ、浮いたってことはお風呂から上がったら重たくなるってことだけど。そう思うとなんかちょっと邪魔だなこれ。
そんなことを考えていたらお風呂場のドアが開いて誰かが入ってきた。残念、貸し切り浴場の時間は終わりみたい。
でももうちょっとだけお湯に浸かっていたいなと思って、私は特に立ち上がろうとは思わなかった。
……入ってきたウマ娘の顔を見るまでは。
「……んん？　あー！　キミキミー！　ソライロツバサでしょ！」
「……トウカイテイオー」
まさか、よりにもよってテイオーと鉢合わせちゃうなんて。

輝く未来を信じ続ければ、いつかきっと

「いやー、やっとこうやってお話しできるね！」
ニコニコと笑顔を浮かべながら体を洗うトウカイテイオーの尻尾が左右にフリフリと揺れている。
私と話せるのが嬉しい、っていうのは本当らしい。私はあんまり嬉しくないけど。というか早く逃げ出したい。
「ここ最近ずっと探してたんだよー？　でもタイミングが悪いのかいっつもキミいないからさー」
「それはまあ……ごめんね？」
ごめんとはあまり思ってないけど。実際避けてたわけじゃない……と思うし。
ただこっちから探し出して話しかけるような用事もないし、そんな余裕もなかった。
「まあでも今日会えてよかったよー。キミとは一回話をしてみたかったし」
私はそうでもないよ。正直気まずいんだよなあ！
選抜レースで負けた時の気持ちはそう簡単には消えてくれてない。
自分でも性格悪いと思ってるけど、あれから何度テイオーさえいなければと考えたことか。
そんなことを考える相手が今目の前にいる。頭ではただの逆ギレって分っていても、胸の中はぐつぐつと何かが煮えたぎったような感触が消えない。
「ん？　どーしたの？　なんか変な顔してるけど」
気が付けば、体を洗い終わったテイオーが湯船につま先を沈めてるところだった。
ハッとなって顔をそらした私の真横にテイオーが座る。もうちょっと距離取ってくれないかな？
「別に。なんでもない」
「当ててあげよーか？　ボクに負けた時の悔しさ引きずってるでしょ」

「っ！」
　返事はしない。でも、図星を突かれて明らかに顔をしかめてしまった。それが何よりの返事になっているとは思う。
　なんなのコイツ。足も速いし心も読めるっていうのかな。
「あ、図星でしょ？　……良かったぁ」
「良かったって……何それ」
　ほんっとに何なの!?　人が悔しがるさまを見るのが趣味な訳このチンチクリンは!?
　思わずテイオーからなんて思われるかとかも頭からふっ飛んで思い切り隣の憎いこんちくしょうをにらみつける。
　すると、テイオーは慌てたように顔の前で手を左右に振った。
「ああ！　違う違う！　誤解だってば！」
「何が!?」
「だから、勝ち負けに真剣になってくれる子だったっていうのが確認できたのが嬉しかったんだってば！」
　テイオーの言葉に、思わずキョトンとする。
　一体どういうことだろう、と首を傾げそうになる前にテイオーがほんの少しだけ寂しそうな顔をして話し始めた。
「キミも知ってると思うけど、ボクってテンサイでしょ？　だから模擬レースとかこないだの選抜レースとかでも負けたことないんだ」
「ごめん、やっぱ一発ぶっていい？」
「何でよ！　事実じゃんか！」
　事実だから余計ムカつくんでしょ！　って言葉が前歯の裏側まで出かかったけど必死で飲み込む。
　このままだと話が進まないだろうし。
「……続けていいよ」
「もー、ビックリさせないでよね。……それでさ、最初の一、二回目はそうでもなかったんだけど入学して半年も経ったらさ。変わってきたんだよね」
「変わったって、何が？」
「ボクと一緒に模擬レース走った子達の態度だよ。だんだん皆『テイ

オー相手じゃ二着でも仕方ないよね』って笑うようになってきたんだ」
その言葉を聞いて、私はあの選抜レースの日を思い出す。
確かにあの日、そういう感じのことを言ってたウマ娘がいた。だからあの後、あんなにも悔しい思いをした自分が変なのかって悩む羽目にもなったんだっけ。
そんなことを思い出す私をよそにテイオーが続きを話す。
「ボクの目標はカイチョーだから、正直そんなこと言う子達なんて相手する暇もないんだけどさ。……でもやっぱり、そういう子達と走っても楽しくないなって」
最後の言葉は誰に言うでもない、ポツリと溢した独り言みたいなものだった。
それでも、私たち以外にいないお風呂にその言葉は大きく響き渡った。
声は小さくても、テイオーの心の底からの言葉っていうのがなんとなく分かったような気する。
「だからさ！」
ちょっとしんみりした雰囲気を振り払うようにテイオーが私の方に笑顔を向けた。
「あの選抜レースの最終直線でボクに競ってきてくれたの、すごく嬉しかったんだ！」
ああもう。なんて綺麗な笑い方するのさ。
目の前にいるのは最高のパフォーマンスの私を完璧に打ち負かした憎い位の相手なのに。
「それに、ボクが前に出た後でもう一回並ばれたのは本当にヒヤッとしたんだよ？」
そう言いながらバッチリ一着取ってったアンタのせいで、この数日はどうしたらいいかもわからないくらい頭グチャグチャになってたって言ってもいいのに。
「でもあの時のキミの必死な顔を見て、ビックリしたし嬉しかった。まだボクと本気でやってくれる子がここにもいたんだって」

ズルいじゃん。そんないい笑顔でそんなこと言われちゃったら、なんかもう怒れないよ。
それにいつもよりも力が出たのは私だって一緒だったんだし。
「だからまた走ろう！　って言いたかったのに、キミは寮にいないしさー！」
そういってほっぺたを膨らませるテイオーから、そっと目をそらす。
気まずいわけじゃない。ただ、ちょっと喉がキュッと締まるような感覚がして、目がぼやけて来ただけ。
「あれ？　どうしたの？　ボク、なんか変なこと言っちゃった⁉」
「うっさいバカテイオー。なんでもないったら」
「バカ⁉　バカって言った今⁉　このサイキョームテキのトウカイテイオー様に向かってバカって言った⁉」
ちょっと待って。聞き捨てならないぞそれは。最強は私のものだし！
テイオーの言葉に反射的に彼女の方を振り向いて私も声を張り上げる。
「はああ？　最強は私のものですけど⁉」
「ふん！　そういうのはボクに一度でも勝ってから言ったら？」
「ぐっ……！」
くっそぉ。それを言われたら何も言い返せない。
あ、テイオーが勝負に勝ったみたいなドヤ顔して胸張ってる。すっごいムカつく……！
と、そこで私は一つ名案を思い付いた。
「テイオー、勝負しよ」
「勝負？」
「そう。これからグラウンドで２０００ｍ一本勝負」
私の言葉にテイオーはちょっと嫌そうな顔をした。
「今ボクお風呂入ってるんだけど。走ったらまた入りなおさなきゃいけないじゃん」
「また入ればいいじゃん」

汗をかいたら体を洗えばいい。それに、今じゃないとまた予定合わせなきゃいけないし。
でも、テイオーはまだちょっと嫌そうな雰囲気を出していた。
「大体、門限はもうとっくに過ぎてるよ」
「バレなきゃ問題ないじゃん」
「バレたらどうすんのさ」
「反省文テキトーに書けばいいよ。……それとも、サイキョームテキのトウカイテイオー様は負けるのが怖いの？」
分かりやすい挑発だと自分でも思う。でも、テイオーならきっと乗ってくれると思った。
そして、予想通りテイオーはムッとした顔をする。
「……そこまで言うならいいよ！　どっちが速いか、ターフの上でハッキリさせてあげるから！」
よし、乗ってきた！　後はさっさとお風呂を出てグラウンドに向かわないと。
就寝時間までには戻らないと、寮長がドアと窓の戸締りをしっかりやるって聞いたことがあるから帰れなくなる。
善は急げとばかりに私達は勢いよく湯船から上がって脱衣所への扉に向かって早歩きする。
「いい？　ここからは時間との勝負だからね！」
「分かってるって！　ま、もう一回ここに来るときに笑ってるのはボクだけどね！」
「言ってなよ。次にベソかくのはソッチの方だけどね」
そんなことを言いながら体を拭いて、脱衣所への扉を開く。
「ふふ、なんだか楽しそうなことを話してるねポニーちゃん達？」
けれど、そこにはいい笑顔を浮かべたフジキセキ寮長が立っていた。
「あっ、寮長……コンバンワ」
「うん。こんばんはソライロツバサ。それにトウカイテイオーも」
まずい。さっきの話聞かれてたかな……。聞かれてなかったら何とか誤魔化せば……。

「門限はもう過ぎてるんだから、今日はおとなしく部屋に戻るんだよ？」
ヤバい。バレてる。
「や、やだなあ。そんなこれから外に出るわけないじゃないですかー」
「そう？　２０００ｍ一本勝負とか聞こえてきた気がするけど、気のせいだったかな？」
うわあ！　全部聞かれてる!!
と、とにかく何とか誤魔化さないと。
「そ、そうですよ！　気のせいですって！　ね、テイオー！」
とりあえずテイオーにも助太刀してもらおうと、隣にいるはずのテイオーの方へ顔を向ければそこには誰もいない。
あれ、と思って辺りを見回せばいつの間にかテイオーはいそいそと着替え始めていた。
「ちょっと！　何一人で着替えてんの!?」
「ボクは何も知らないもんね」
すがすがしい位の棒読みじゃんか！　裏切ったなテイオー！
「まあまあ。未遂だから見逃してあげるし、ポニーちゃんも早く服を着ないと。風邪をひいちゃうよ？」
「へっくち！」
寮長に言われた瞬間くしゃみが出た。確かに、これは早く服着ないと。風邪でも引いたら大変だ。
いそいそと自分の服を突っ込んだ籠の前に立って服を着る。
最低限の服を着てから、一旦髪を乾かしたり化粧水とか保湿クリームを塗ったりのスキンケアも忘れずにやった。
ちなみにそんなことをしてる間にテイオーは「お先にー」と言ってさっさと部屋に戻っちゃった。薄情なやつめ。
それでもやることをやり終えてから最後にジャージを着てようやく脱衣所を出ようとした時、不意に寮長に声を掛けられた。
「大分スッキリしたみたいだね」
「え……」
驚いて振り向けばいつものいたずらっぽい笑顔とは違った、優しい

笑顔を浮かべた寮長が私のことを見ていた。
「この数日、ずっと様子がおかしいってフードゥルアルクから聞いてたんだ」
「それは……」
まあ、ルームメイトじゃなくても分かってたかもしれない。
テイオーに選抜レースで負けて、ネイチャにトレーナーが付いたって分ってからは自分でも分かるくらいしんどかったから。
「大丈夫、きっとキミは強くなるよ」
「……でも、私まだトレーナー付いてません。このままじゃテイオーにどんどん差をつけられて……」
そうだ。現実問題、私にはまだトレーナーがいない。
トレーナーがいるかいないかは、それだけで実力に大きな差が出るのはこの学園の生徒なら誰だって知ってる。
そもそも、トレーナーがいないとデビューもできないわけだし。
でも、次にスカウトが受けられるとすれば夏の選抜レースでキッチリ勝つしかない。
それまでの三か月、教官のトレーニングと自主練だけでテイオー達に追いつけるのかな。
いや、それは無理だ。だって、そうだとしたら担当トレーナーの意味がなくなるし。
「すぐに見つかるよ。夏まで待たなくてもね」
そんな私の悩みを見抜いたかのように、寮長がくすりと笑いながら私の頭に手を置いてくる。
なんだか子ども扱いされてるみたいで嫌だったけど、あからさまに振り払うのもなんだか気が進まなくてされるがままになる。
「心配しなくても大丈夫。だってキミは”あの”期待の新星トウカイテイオーに追い比べを仕掛けて、一瞬でも並びなおしたウマ娘なんだから」
「……でも負けました」
「結果だけを見ればそうだね。でも、この学園のトレーナーはそれだけを見てるわけじゃない」

期待、してもいいのかな。明日あたりに学園内をフラッと歩いてたら、スカウトされるなんて夢みたいなこと。
「選抜レースって大一番で有力バと言われたテイオーに食らいつけるウマ娘なんて、それだけで将来性抜群だと思うよ？」
そうかな。そうだといいな。
そんなことを考えながら、私は寮長を見上げる。
「私、テイオーに勝てると思いますか」
「キミが勝ちたい、勝てると強く信じ続けられたなら。そうしたら、奇跡は起こるんじゃないかな」
私の問いかけに寮長は軽くウィンクしてそう答えてくれた。
うん。とりあえず、明日からまた頑張ろう。
そう思ってギュッとこぶしを握り締める。
「寮長、ありがとうございました」
「ポニーちゃんが元気になれたのなら、何よりだよ」
そう言って微笑んだ寮長が私の頭から手をどける。
それを合図に、私は自分の部屋へ向かって歩き出した。
とりあえず、明日の朝はどこを走ろうかな。そんなことを考えながら。

「あ、分かってると思うけど、キミは今週いっぱい朝の自主練禁止だからね？」
後ろから響いた寮長の言葉に、私は静かにその場に崩れ落ちた。

# それでも、その手を伸ばさずにはいられない

「なぁーんーでーよぉーー……ねいちゃぁぁー……」
「ツバサ、そこアタシの席なんだけど」
アタシは朝一番から顔を引き釣らせていた。
何故か友達のソライロツバサがアタシの机に突っ伏していたからだ。
大体、この子は隣のクラスだったはずなのになんで、と考えてすぐにその理由に思い当たる。
この子、数日前に朝の自主練をしすぎて遅刻したせいで朝練禁止されてるんだった。
ちなみに自主練のせいで遅刻したのは今回ので進級してから通算3回目。
まだ4月も折り返しに入った位なのにそんなにやらかしてたらそりゃ禁止にもされるよね。
「朝走らないとスッキリしないぃぃーー……退屈なんだよぉぉ……」
「だからってアタシの席占領しないでくれませんかね……」
「ウマ娘が走るのはもはや本能なんだよ??? 世の動物達だって本能のままに生きてるじゃんー」
「アタシらは一応ヒトなんだから理性もあるでしょ」
とりあえず机の横にスクールバックをかけてからツバサをどかそうと肩を押した。……動かない。
ちょっと力を込めてもう一度押してみる。動かない。
「いや、どいてよ」
「やだ。私のこの悲しみがなくなるまでどかない」
「いつまでかかるのさソレ……」
知らなーい、とこの仕方がない友人は突っ伏したまま隣に立つ私を横目で見上げる。
構えと言わんばかりの目をされても困る。大体、朝のホームルームまでもう時間がない。
「ていうか、早く戻らないとホームルーム始まっちゃうでしょ。これ

以上遅刻したらまずいんじゃないの？」
「ホームルームまで後１０分。隣の教室までは1分で行けるからあと９分は大丈夫」
　何が大丈夫なのさ、と言ったところで聞く子じゃないのでため息をついてほっぺをムニムニしてやることにする。
　うにゃーと気の抜けた声を出しながらも、そこまで嫌そうにしないので本当に構ってほしいだけらしい。
「あ、ネイチャにツバサじゃん。なにやってんのー？」
「げっ、テイオー……」
　ツバサの隣に立ってほっぺをムニムニしていると、キラキラ主人公もといテイオーが教室に入ってきた。
　途端にツバサの顔がピキッと強張る。
　どうも、ツバサは選抜レースでテイオーに負けてからこの子に苦手意識を持っているみたいだった。
　一方のテイオーと言えば、カケラもそんな気配を感じさせずにいつも通り自信に満ち溢れた表情で近寄って来る。
「おやおやー？　サイキョームテキのトウカイテイオー様にする挨拶にしてはずいぶん個性的じゃん」
「うっさいバカテイオー。あと、最強は私だってば」
「なにおう!?　そーゆーのは一回でもボクに勝ってから行ってよね！」
「次の模擬レースは私が勝つし！　その時になって後悔しても遅いんだからね！」
　イーッ！と歯を剥き出しにして威嚇をするツバサとひょっとこみたいに口を尖らせて翼をにらむテイオー。
　それはまるで仲の悪いネコ同士が威嚇をしあっているかのような光景だった。
「アンタ達、意外と仲いいじゃん」
「どこが!?」
　私の言葉に全く同じタイミングで振り向いてくるところとかだよ、とは言わなかった。

見てて面白いけど、そろそろ本当にホームルームが始まる。ツバサには席をどいてもらわなきゃいけない。
「ほら、テイオーも一回席に戻んなー。あとツバサはいい加減自分の教室に帰りなさい」
ツバサの方を掴んで無理やり立たせる。ツバサは相変わらずブーブー言ってたけど、全部無視して隣の教室まで背中を押して放り込んできた。
そうして誰もいなくなった自分の席に座ると、なんだかどっと疲れが来た。何が悲しくて朝からこんなに疲れなきゃいけないんだか……
「うんうん。まるでおねーちゃんみたいだね、ネイチャ。よ、ナイスネーチャン！」
「ナイスネイチャだ！」
最後の最後でとどめを刺してきたテイオーのせいで、余計に疲れた……
私のやる気が少しだけ下がった。体力はごっそり減った。

朝の自主練禁止、っていうのは正直なところかなりきつい。
トレセンに入る前からずっと朝起きてすぐに走っていたから、その習慣がなくなるっていうのはそれだけで違和感がすごいのだ。
それに、純粋に実力が付くどころか維持すらできなくなるかもしれないと思うと不安で仕方がない。
……まあ、4月になって半分くらいで3回も遅刻した私が悪いんだけど。
そんなわけで、どうにもモヤモヤした気持ちを抱えながら午後になった。
今日の午後は4コマ目がレース座学、5，6コマ目が基礎トレーニングだ。今は、5コマ目のペース走の真っ最中。
勉強はあんまり得意じゃない。さっき授業が終わったところだったけど、うつらうつらしてて正直記憶はあいまいだ。
三女神様のおまけか、前世の人間の時の頭の出来具合がちょっとだ

けソライロツバサになってからも引き継がれているみたいで、気合が入れば割と知識もすらすら入るんだけどね。
それはそれとして、やっぱりちょっと眠たくなる。
ソライロツバサは座ってるよりも走ってる方がずっと好きだし。
……そういえば、ネイチャはトレーナー付いたって言ってたけどテイオーはどうなんだろう。
まあ、テイオーのことだからいいトレーナーが付いたのは間違いないんだろうけどさ。
だって、選抜レースの日テイオーの周りにはあんなにもたくさんのトレーナーがいたんだから。
きっと、あの中にはG1ウマ娘を何人も出したすごいトレーナーだっていたに違いない。
「ソライロツバサさん！　ペースを上げすぎですよ！」
「ハッ、ハイ!?」
不意にメガホン越しの教官の声が耳に突き刺さってきて我に返る。
慌てて辺りを見渡せば、一緒にペース走をやっていたはずのクラスメイト達から一人だけ私が飛び出していた。
やっちゃった、と思いながらペースを落として皆を待つ。
「どうしたのー？」
「そんなに急いでもすぐには終わんないよー」
一緒に走ってるクラスメイト達がカラカラと笑うのに合わせて、私も笑う。
でも、心の中では笑えなかった。
フジ寮長はすぐに私にもトレーナーが見つかるって言ってくれたけど、本当なのかな。
もしかしたら、トレーナーバッジを持ってる人を見つけて逆スカウトとかやった方がいいのかもしれない。
でも、それで誰にも見向きもされなかったら……？
そうしたら、私はどうしたらいいんだろう。
「そういえばさー、聞いた？」
「えー、なになに？」

「放課後、テイオーとシンボリルドルフ会長が模擬レースするんだって！」
「えー!? それマジ？ 授業終わった後からでも場所取れるかなー？」
耳に飛び込んできたのはそんな他のグループのウマ娘たちのおしゃべり。
だけど、その内容は私の心を大きく揺さぶるのには十分な内容だった。
テイオーと、あのシンボリルドルフ会長が模擬レース。
期待の新星と、名実ともに最強の皇帝の直接対決。
見逃すなんてありえない。
ううん。違う。私もそこに混ざりたい。そして勝ちたい。
分かってる。ルドルフ会長はもちろん、テイオーにだって多分勝てない。
でも、だから諦める？ あの日、選抜レースで3着以降になった子達みたいにどうせ勝てないって言って？
ふざけんな。
私は最強に――レースで勝つためにトレセン学園に来た。
別にその模擬レースに勝ったとしても、それで私が最強になれるわけじゃない。
ただ、その模擬レースで一番速かったウマ娘。そう次の日くらいまで騒がれるくらいで終わる。そうだとしても。
どうやってテイオーとルドルフ会長の模擬レースに混ぜてもらえるかで私の頭の中は一杯になっていた。

## 怯えるワタシ、猛る私

午後の授業が終わった後、私は教室に戻らずグラウンドの隅に立っていた。
テイオーとルドルフ会長の模擬レースがあるからか、授業が終わる直前くらいにはもうちらほらとトレセン生徒や一般の人たちがギャラリー席に入ってきていたのは見ていた。
普通、この後のレースに用があるなら私もそのギャラリー席に行くべきなんだと思う。
だけど、私は二人のレースが見たいんじゃない。二人とレースがしたい。
もちろん、突然の飛び入りを許してもらえるとは思ってない。
大体、一緒に混ざったところで私一人置いて行かれるだろうなってことくらい想像も出来る。
テイオーにはこないだの選抜レースで分からされたし、会長に至ってはやらなくたって勝てないことくらい分かる。
むしろ改めて自分がそんなに強くないって現実を見せられて、心が折れてしまうかもしれない。
それを考えたらここで飛び入りなんて賢くないやり方だと思う。
ちゃんと勝負が出来るくらい実力をつけてから、挑んだ方が得るものだっていっぱいある。
「……なんて、いくら理屈を並べたって意味ないか」
頭の中でそんな理屈がぐるぐるし始めたところで、私は思わず小さく噴き出した。
そうだ。そんなに賢いなら、私は朝の自主練で遅刻なんてしないし遠くまで行きすぎて家に帰れなくなるなんてポカもしない。
やりたいと決めたら、自分でも我慢できない。
どうしてだか分からないけど私（ソライロツバサ）はそういうウマ娘だった。
ギャラリー席の方から歓声が上がる。声のした方を見れば、テイオーとルドルフ会長が並んでグラウンドに入ってきたところだった。
さあ行こう。あとのことはどうとでもなるさ、きっと。

「申し訳ないが、今日はテイオーとの約束の日だからね。また別の機会にしてはくれないか」
困ったように眉尻を下げながら、それでもこちらに気をつかってかルドルフ会長は微笑んでくれる。
「そーだそーだ！　カイチョーはボクと走るんだから、ツバサは邪魔しないでよね！」
半面テイオーはムッとした気持ちを隠そうともせず頬を膨らませている。
まあ、そりゃそうか。きっとテイオーのことだから、ルドルフ会長と走れるこの日を指折り数えて待ってたに違いない。
そこに私というおじゃま虫が入ってきたら、頬を膨らませるくらいはするよ。私だってそうする。
でも、それで引けるほど私の頭は良くなんてない。そんなお利口さんだったなら、そもそもこんなことは頼まない。
だから、私は勢いよくルドルフ会長に向かって頭を下げる。
「そこを何とか！　二人のスタートの邪魔にならないようにスタート位置は大外でもいいので」
そう言って、チラリとルドルフ会長の顔を見てみる。
そこにはさっきまで私を気遣って苦笑いしていた皆の生徒会長はいなかった。
鋭い視線で私をまっすぐと見つめる、皇帝シンボリルドルフがいた。
「それは、『大外からのスタートであっても私達と勝負が出来る』……そう言っているのかな？」
いや、鋭いなんてモノじゃない。めちゃくちゃ怖い。
あんなに無理を言ってでも混ざりたいと思ってた気持ちが、一瞬で砕け散りそうなくらいの威圧感がルドルフ会長から私に向かって放たれている。
膝がガクガク言い始めた。口の中がパサパサになって、唾が口の中でネバネバする。

体の芯から震えが来て、手足の指先はもう春なのにすごく冷たくなってることが触らなくても分かる。
怖い、逃げたい。ごめんなさいって言って、なんにもなかったことにしたい。
ああ、やっぱりワタシは昔（前世）からなんにも変わらない。やってみせますと言ったのに、土壇場になって怯えて逃げ出したくなる。
ワタシの言ったことは、つまり『どんなに不利でもいいからレースに混ぜてくれ』って言ったのと同じだ。
レースをする以上、ワタシ達は勝つために走る。
それなら、自分からわざわざ不利を背負うマネなんてするべきじゃない。
だってそれは『不利を背負ったってアナタ達には勝てますよ』っていうのと同じだから。
それを言っていいのは、周りよりもずっと強い実力を持っているって皆から認められているようなウマ娘だけだ。
デビューもしてない、既に模擬レースでも何度か負けているワタシが言っていいようなセリフなんかじゃ、ないんだ。
ましてや今回の相手はテイオーとルドルフ会長。明らかにワタシよりも強い二人に対して不利な条件を背負ったんじゃ、なおさら勝ち目がなくなる。
「君は、どういう覚悟で持ってソレを口にしたんだ？」
ワタシを突き刺すような目で見ながら、ルドルフ会長は続ける。
「よっぽどこのレースに混ざりたい。その気持ちは認めよう。しかし、レースをするウマ娘としてわざわざ不利な条件でもいい、と軽々しく言うことの重みを君は分かっているのか？」
分かってる、なんて口でいうのは簡単だ。
でも、本当に理解できているのかっていうと自信はない。
勝てない勝負になっても二人のレースに混ざることは、果たして意味があることなのか。
それよりは、ギャラリーに混ざって二人の動きを見た方が……
「違う……！」

「……違う、とは？」
そうじゃないでしょ。意味とか価値とか重みとか、そんなことはどうだっていい。
何のためにここに来た。私（ソライロツバサ）が夢見たことは何だった。
「私が自分で言ったことの意味なんて、分かりません」
たくさんのライバル達とレースをする。
「きっと無礼（ナメ）たこと言ったんだろうってことくらいは分かってます」
ライバルたちがいっぱいのレースで勝つ。
「それでも……私（ソライロツバサ）は二人と走って、勝ちたい」
相手がどんなに強くたって、それ以上に強くなって勝つ。
約束したんだ。大見得きって地元を飛び出してきたんだ。
「最強になるって、決めたんです」
たとえその相手が、今は明らかに敵わないようなウマ娘が相手でも。
私の決めた最強は、勝てる相手にだけ勝ってなれるようなものなんかじゃない！
ルドルフ会長が小さくため息を吐く。
「正直に言って、大外スタートなどすれば君は負けるだろう。いや、勝負の土俵にも立てない」
「それがここまで来て逃げる理由になりますか」
「明らかに不調、もしくは不利な勝負に挑むことは賢いとは言えないぞ」
「今から負けることを考えて走るウマ娘がいるんですか」
「無謀な挑戦の結果、さまざまな要因で折れた子達も少なくない」
ああ、ルドルフ会長が言外にいいから諦めろと言ってるのが分かる。
意地を張っても仕方ないだろうと。
それはきっと正しい。ワタシだって今からでもごめんなさいって言って逃げるべきだって思ってる。
でもダメなんだ。私（ソライロツバサ）はもうオカシクなっちゃってる。
勝ちの目なんてないって分ってて、そこに得るものがないって言わ

れてたって。
「私を止めたきゃ走りで黙らせてください」
もう、二人とレースをしたいという気持ちが抑えられない。
体の奥から熱が沸き上がって来る。冷たくなっていた指先にじんわりと熱が戻っていく。
小さく体が震えるのは、ルドルフ会長の威圧が怖いからじゃない。
「ハァ……分かった。テイオー、突然の飛び入りになってしまうが構わないか？」
「ええ～!? ボクずっとカイチョーと二人で走れるって今日を楽しみにしてたのに!!」
テイオーがキッと私を睨んだ。罪悪感はなくはない。
「すまないな。だが、ソライロツバサを止めるにはもう走るしかなさそうだ」
ルドルフ会長がそう苦笑いをしながら私を見る。
「それに、今は彼女に混ざってもらった方がいいと思うんだ」
その言葉の真意は分からないけど、なんにしても混ぜてもらえることになったみたいだ。
いいね。いいよ。最高じゃん。
「う〟――……カイチョー、今度は二人っきりでレースしてよね！」
「そうだな。この埋め合わせはするさ。約束しよう」
まるで仲のいい親戚のお姉さんと妹分みたいなやり取りをする二人を横目に、私は軽く準備運動を始めた。
ここまで来たら、もう戻れない。あるだけ全部、ひねり出して走るだけ！
さて、じゃあ……やりますか！

# 圧倒的な実力差

目を閉じて、ゆっくりと胸いっぱいに息を吸ってから吐き出す。
目を開ける。目の前には誰もいないターフがある。
一歩前へ出て、いつでも走り出せる体勢を取る。
それと同じくらいのタイミングで、左の方から二つ同じように芝を踏みしめる音が聞こえた。
結局、私は大外スタートにはならなかった。
代わりに、枠番は3番。一番外側だ。内側からテイオー、ルドルフ会長、私の順で並んでいる。
内枠の柵の更に内側に立っている学園の教官がホイッスルを手に持つ。アレが鳴ったらスタートだ。
じんわりと背中が熱を持つような感触がする。左側から今までの模擬レースとは比べ物にならない程のプレッシャーを感じる。
でも、そのプレッシャーがかえって私のテンションを上げる。
スゥっと教官が息を吸う音が聞こえた。グッと拳を握る。
短く、鋭いホイッスルの音が私の耳に突き刺さった。
同時に、地面を蹴飛ばしてコースへ飛び出す。
レース内容は２５００ｍ。デビュー前のウマ娘には長めの長距離と言っていいかもしれない。
先頭はシンボリルドルフ会長。その後追うように私とテイオーが並んで走る。
ペースはほどほどよりちょっと速いくらい。このペースだと終盤にスパートをかけたらゴール前で失速するかもしれない、それくらい。
前を行くルドルフ会長がチラリと後ろを見る。位置確認の為……
いや、違う。
私の顔を見てほんの少しだけペースが落ちた。それが何を意味するか、分かった瞬間カッと頭に血が上る。
無礼（ナメ）られている。このヒトは私なんか相手にならないって言ってる。

怒りのままにペースを上げようとするのを、奥歯を思い切り噛みしめてこらえた。
落ち着け。分かってたことでしょ。相手はあの皇帝だ。私達が全力を出し切れるようにペースを調整することなんて簡単にできておかしくない。
でも、無礼（ナメ）られたままってのは腹が立つ。
じゃあどうする。出来ることなんてあるかも分からない。
レースは進む。もう折り返しだ。テイオーもルドルフ会長も動かない。
いっそ早めに仕掛ける？　ダメだ、そんなことをしてもゴール前で失速するだけ。
……いや、行けるかも？
思い出せ。テイオーと走った選抜レースのことを。
あの時は２０００ｍと距離は違ったけど、早めに仕掛けた。
ゴールでキッチリスタミナを使いきれると踏んだあの場所でスパートをかけて、それでもテイオーに追いつかれてからもう一段スピードを上げられた。
もし、もし同じことが今回でも出来たら？
いや、やるぞ。それでほんの少しでもルドルフ会長の余裕を消せるなら。
残り今の位置から計算して、残りは８００ｍ。仕掛けるなら、もうすぐだ。
息は大分上がってきてる。スパートをかけて、そのスピードを維持できるかどうかはかなり怪しい。
それでも、やる。負けるつもりでこのレースに混ざったわけじゃない！
「ッ……よし！」
ペースを上げる。ゴールまではあと６００ｍくらいか。
「行かせないよ！」
そんな声と共にテイオーが私の隣に並んできた。不意を突いたつもりはないけど、それでもすぐに対応してくる辺りテイオーも同じよ

うなことを考えていたのかもしれない。
私達がペースを上げたのに気づいたルドルフ会長が私の方を見る。
「譲らんぞ！」
ルドルフ会長はペースを上げた私達よりもさらにスピードを上げてリードを保ってくる。
ゴールまで後４００ｍ。直線に入る。
さあ、覚悟を決めろ。もう一回、アレをやってみるんだ！
「ゼッ…ゼッ……ふッ……！」
「はぁっ、はぁっ……！　まだまだぁっ!!」
ありったけの力で地面を蹴って加速し、前だけを見る。
それでも。
「譲らんと言ったはずだ！」
届かない。離れる。前にもこんな光景を見た。選抜レース（あのとき）と同じ……
「ッ……ざっけんなあああああああ!!」
もっと、もっとだ！　もっと地面を蹴飛ばして……！
走れ、前へ！　いや、前へ跳べ!!　ゴールした後のことは考えるな!!
ゴールまで後２００ｍ！　１㎝でもこの差を縮めろ！
胸が苦しい。肺が、心臓が破れそうだ。
足が重い。今からでも力を抜いて楽になりたい。
でもそれ以上に、悠々と前を走るあの姿に腹が立つ！
「こん……のぉぉぉぉぉ!!」
だから忘れてた。
私の隣にトウカイテイオーがいることを。
チラリと視界に入った鹿毛色の髪。
そこに居るのが誰だか分かっていたのに、それでも私はソレを見て一瞬意識がソッチに行ってしまった。
今まで見たことのない、余裕なんてこれっぽっちも感じられない歯を食いしばった必死な表情。
コイツ、こんな顔するんだなんて場違いにも思ってしまって。

ハッとしたときにはもう集中力は完全に切れちゃって。
後はもう、失速して天才二人に置いて行かれるだけのあっけない終わりだった。

ゴール板を駆け抜けて、フラフラになりながらクールダウンに一周走る。
もうルドルフ会長もテイオーも走り終わっていて、会長の傍にはたくさんの生徒達が集まってワイワイしていた。
テイオーは……見えないけどきっとどこかにいるんだと思う。
あるもの全部を吐き出して、今は何も考えられなかった。
フラフラしながら、ゴール板をもう一回通り過ぎてしばらく言ったところで芝の上に仰向けに倒れこむ。
結局勝てなかった。分かってたことだけど。
それでも、やっぱり悔しいものは悔しくて。
喉がきゅっと締め付けられるようなあの感覚が来る。
もっと、もっと強くなりたい。
いつかはあの二人に本気を出させて、その上で勝てるくらいの速さが欲しい。
「ツバサ!!」
聞きなれた声。でも、いつもよりなんだか焦ってるような声。
ゆっくりとそっちへと目を向けると、青鹿毛色の髪をハーフアップにした黄金色の目のウマ娘。
「フー……？」
フードゥルアルクが心配そうな顔をして私に駆け寄ってきてた。
「大丈夫!?　先生呼ぶ？」
「え……？　あー、ううん。大丈夫」
あんまりフーを心配させまいと、笑顔を作る。
でも、疲れて上手く笑えなかったかもしれない。
「ねえ、フー？」
「どうしたの？」
「部屋までおんぶして」

私の言葉に、フーは一瞬キョトンとしてから仕方ないなって言いたげに笑って私に手を差し伸べる。
その手を取って起き上がってから、かがんでくれたフーの背中に覆いかぶさった。
そんな私を軽々と背負って、フーは歩き出す。流石ウマ娘のパワー。
「明日のデザート頂戴ね」
「それは断固拒否……」
「じゃあここでおろそっかなー」
「この人でなし―」
そんななんて事のないおしゃべりをしてた時、ぷつりと何かが切れるような感じがした。
目の前がはっきり見えなくなって、ぽたぽたと涙がこぼれる。
「また負けちゃった……！」
「うん」
「悔しいよ……！　勝ちたかったんだ……！」
「そうだね」
「強くなりたい……！　もっと、もっと……！」
「なろう。誰にも負けないくらいに」
フーの背中に顔をうずめながら、私は泣いた。
選抜レースの日の分も合わせて、いっぱい泣いた。

## 眩しい二等星たち

「あ、ネイチャ！　ネイチャもテイオーのレースを見に来たの？」
「まあ……一応いつか勝たなきゃいけない相手かもだし？」
クラスメイトに苦笑いしながら、ギャラリー席の一番前の柵にもたれかかる。
テイオーがシンボリルドルフ会長と模擬レースをする。
そんな話を聞いて、なんとなくコースのギャラリー席に来てみたはいいけど。
なんというか、周りには既にデビューしてるウマ娘とかテイオーやルドルフ会長を見に来たらしいトレーナー達がいっぱいでアタシは場違いな気がしてきた。
アタシはただ何となく、主人公なキラキラを持ったテイオーがあのルドルフ会長を相手にどこまでやれるのか見てみたいと思っただけ。
アタシにもトレーナーさんが付いて、これからデビューに向けてどんどんトレーニングを重ねていくところだったから目標がどんな感じかをちょっとでも知りたかったのは本当だけど。
……今は勝てなくても、いつかきっと勝てたらいいなんて思ってさ。
けど、そこで待っていたのは予想外の展開だった。
友達のソライロツバサが二人のレースに飛び入り参加してたんだ。
当然、ギャラリーにいた他の生徒やトレーナー達は驚いたような、困ったような様子でざわざわしていた。
結局、ツバサはそのまま二人のレースに混ざることになったみたいで一緒にスタートラインに並んでいた。
「あのウマ娘、誰だ？　デビューはしてないよな？」
「ああ、ソライロツバサって子だよ。入学した時は三席くらいの成績だった」
「思い出した。トウカイテイオーと同じ選抜レースに出て、二着になってた生徒ね」
傍にいるトレーナー達の話が耳に入って来る。

そう、ツバサはああ見えて割かし優秀な子だ。勉強もしてないように見えて成績はどちらかと言えば良い方だし、走りに関しては普通に同学年の中じゃ上から数えた方が早い。
「けど、既に今年度に入ってから自主練のし過ぎで遅刻を3度もして自主練禁止されたとか」
「気性難なタイプか……」
「素質は間違いなさそうだけど、その気性はちょっとな……」
そんな遠慮のない近くのトレーナー達の言葉に、思わず顔をしかめる。
だけど、トレーナーさんが付いた今だから分かる。
アタシのトレーナーさんはいつも今のアタシの実力に合わせてトレーニングメニューを組んでる。
何が足りないのか、何を伸ばせばもっと速くなれるのか。
今ならどれくらいの体力があって、どれくらいの負荷までだったら掛けられるのか。
きっとアタシ達には想像もできないくらい、たくさんの知識とかもとにしてメニューを決めてくれているんだ。
そんなトレーナーさん達からすれば、ツバサみたいに放っておくとどこまでも走ったりするタイプは扱いにくいことこの上ないと思う。
「ましてや他所のウマ娘の模擬レースに飛び入り参加するとなると……」
「ああ、相当な気性難とみて間違いない」
「もったいないな……」
トゥインクル・シリーズは甘くない。ウマ娘の力だけで、トレーナーの力だけで勝ち上れるような場所じゃないんだ。
それはあのシンボリルドルフ会長にさえ、信頼するトレーナーが付いていることが証明している。
そういう場所で、自分勝手な行動ばかりをするウマ娘は最初は勝ててもその後は続かない。きっとそうなんだろう。
だから、誰もがツバサのことをそこまで見ようとしていなかった。

周りのみんなも、ルドルフ会長がどんな風に勝つのかとかテイオーがどこまで食らいつけるかとか、そんなのばっかり。
招かれざる客。小説なんかでよく見る、そんなセリフが頭の中に浮かぶ。
まさに今のツバサだった。
だけど、当のツバサはそんなこと欠片も気にしてないみたいに準備運動をしている。
心なしか、嬉しそうな表情までして。
スタート担当の教官がホイッスルを手に三人の近くへ寄って、整列を促した。
内側からテイオー、会長、ツバサの順だ。ツバサが一番不利な外側なのは飛び入り参加だからだと思う。
ホイッスルの鋭い音がアタシの耳にかすかに届く。
それと同時に三人がコースへ飛び出していった。
「ペースはデビュー前のウマ娘が走るのにしてはまずまず、ってところか」
「シンボリルドルフが完全にレースを支配してるわね」
「そうだな、今後ろを見てペースを落とした。さっきまでのペースじゃ、後ろ二人が潰れると思ったんだろう」
近くのトレーナー達が今の状況を分かりやすく説明してくれる。
私の目から見てもその通りだったけど、もう一個アタシは気づいたことがあった。
ペースが落ちた時、ツバサが怒ったように目つきを鋭くしていた。
あの子を知ってるウマ娘たちの中じゃ負けず嫌いで有名なツバサだから、会長のペースダウンの意図まで気づいちゃったんだと思う。
一瞬バランスが崩れたようにも見えたけど、かからずには済んだみたいだった。
レースが終盤に差し掛かったところで、ツバサとテイオーがペースを上げる。
だけど、ルドルフ会長はそれを見てから前を譲らないようにさらにペースを上げた。

最終直線に入ってからもう一回ツバサとテイオーがスパートをかけたけど、会長との距離は縮まない。むしろそのまま離れる。
ああ、やっぱりシンボリルドルフは絶対だ、そんな雰囲気がギャラリー席を支配する。
その時だった。
「ッ……ざっけんなあああああああ!!」
あたりに響き渡る叫び声。
声の主はツバサだった。
「お、おい……シンボリルドルフとの距離、縮んでないか？」
「あそこからもう一度加速!?　無茶だわ！」
最後の底力だったのかもしれない。さっきよりもさらにスピードを上げて、会長との距離を縮めようと鬼のような顔で走るツバサの姿に周りがざわめく。
「こん……のおおおおお!!」
一泊遅れて響いた叫び声。
「お、おい！　トウカイテイオーがすごい速さで追い上げてるぞ！」
トレセンに入学してから一度だって見たことない、テイオーの叫び声と必死の表情。
そして開きかけていた会長との差を縮めていくデビュー前のウマ娘にあるまじき圧倒的スピード。
それでも、ルドルフ会長は慌てることもなく更にスピードを上げて残酷なほどの実力差を見せつけてゴールした。
結果はルドルフ会長が2着のテイオーに3バ身以上もの大差をつけてゴールだった。
デビュー前のウマ娘二人が見せた最後の踏ん張りすらもサラッとあしらうその絶対的強さに魅せられたたくさんの人達が会長のところへと駆け寄っていく。
だけど、アタシはそこに行く気にはなれなかった。
ギュッとギャラリー席の手すりを握る。
今日の主役はずっと〝皇帝〟シンボリルドルフだった。
だけど。

アタシは、なんだか無性に悔しかったんだ。
デビューもしてないアタシ達じゃまず勝てない〝皇帝〟を相手に、それでも本気で食いつこうって力を振り絞ったツバサとテイオー。
確かに二人は一矢報いることすらできなかった。
でも、あの時の二人は確かにキラキラしていた。
結果には繋がらなかったけど、アタシにとってはすごく眩しかった。
それに対してアタシは？　『今はテイオーに勝てない』なんて言い訳して、勝負をしようとも思わなかった。
……なんてカッコ悪いんだろう。
トレーナーさんが付いたからって、浮かれていたんだ。
こんなんじゃ、テイオーに追いつけない。キラキラになれない。
ツバサはまだトレーナーが付いてないって聞いたけど、もしトレーナーさんが付いたらあっという間に追い抜かれる。
「……ッ！」
このままは嫌だ。アタシが勝てるようなウマ娘なんかじゃなかったとしても、こんなカッコ悪いままなのは……嫌なんだ！
アタシだって……アタシだってキラキラになりたいから。
だから、少しでも強くなりたい。
次のあの二人とターフの上で会う時に、胸を張って走れるように。
この熱さがあるうちに、何かしたい。何かしないと落ち着かない。
そうして、いてもたってもいられなくなった私はトレーナー室に向かって走り出した。

# 悔しさを胸に

今日は待ちに待ったカイチョーとの模擬レースの日だった。
あのカイチョーと一緒に走れる。それだけでボクの調子は絶好調！　……だったんだけど。
模擬レースがもうすぐ始まる！　って時になって初めてボクは不安になった。
褒められるのが好きだった。そしてボクはサイキョーだから走れば皆がボクだけを見て、ボクだけを褒めてくれてた。
でも、今日相手するのはカイチョーだ。
無敗のクラシック三冠。それだけじゃない。たくさんのＧ１レースを勝ってきたあの〝皇帝〟シンボリルドルフが相手だ。
つい最近、選抜レースで声をかけてくれた若い男のトレーナーに２５００ｍのタイムを計ってもらってほめてもらったあの日。
カイチョーがあとからやってきて同じ２５００ｍのタイムを計った。
結果はカイチョーの方が２秒速かった。
当たり前だと思った。むしろさすがはカイチョーだ！　って憧れのカイチョーの凄さがなんだか誇らしかった。
だけど、そのカイチョーと直接勝負する。
そんな当たり前のことに気が付いて、初めてボクはレースが終わった後のボクがどうなるかを考えた。
もし、カイチョーに負けたら？　ボクは誰かに褒められるのかな？
カイチョーのタイムも図ってくれたあの若い男のトレーナーが声をかけてくれたけど、なんて答えたかもよく覚えてない。
とにかく不安で、いてもたってもいられなくてスタートラインへ向かったのだけは覚えてる。
そんな生まれて初めてかもしれない感覚にモヤモヤしてたら、どこからかソライロツバサがボクたちの傍に歩いてきた。
一体何の用だと思えば、私もレースに混ぜてくれなんて言い出した。

ふざけないでよ！　と思った。ボクは今日をずっと楽しみにしてたのに、水を差すようなことをしないでよ！　って。
でも、結局ツバサは食い下がってカイチョーが折れることになった。
気に入らなかった。ボクよりも遅いクセに、カイチョーと一緒に走ろうなんて思ってるのが。
絶対に負けるもんかって思った。また選抜レースの時みたいに分からせてやろうとも思った。
レースが始まってからはずっとツバサと並んで走ってた。ボクにとってはそこまでキツイペースじゃない。
でも、ツバサにとってはちょっと辛いのかもしれなかった。
カイチョーが後ろにいるボク達を見て、ほんの少しだけペースを落とす。それがツバサを見てだってことは分かったし、ツバサも気づいたのか怖い顔をしてたのがチラッと見えた。
何にしてもこのままカイチョーに前にいられたら勝てない。
だから、ボクは早めに仕掛けることにした。このペースだったら早めに仕掛けたって十分走り切れると踏んだから。
だけど、ツバサの方がほんの少しだけ仕掛けるのが速かった。ハナ差でも前をとられた。
「行かせないよ！」
そう言ってボクもペースを上げる。ツバサに並びなおす。カイチョーの背中が少しずつ近づいてきた。
でも、カイチョーはすごかった。ボクたちがペースを上げたのを見てから、ボクたちよりももっと速く走りだしたんだ。
縮まらない差に焦りが生まれる。だけど、ここでカッとなってペースを上げてもいいことはない。
やるなら最終直線で一気にフルスピードまで加速して追いすがる。それが今のボクに取れる最善。
そうして最後のスパートをかけた。ツバサも同じタイミングでスパートしてきたから、ボクたちは並んだままカイチョーとの距離を詰めていった。

これ以上ないスピードで走った。追いつける！　って思った。
「譲らんと言ったはずだ！」
なのに、カイチョーのスパートはボクたちなんかよりずっと速かった。
今の今まで……もしかしたら今でさえ本気じゃないのかもしれない。
その圧倒的な実力差に、ボクはただビックリしてた。
だけど……。
「ッ……ざっけんなああああああああ!!」
頭を揺らすような叫び声にハッと我に返る。
ツバサが、これ以上ないスピードで走っていたボクの前に出た。
負ける。カイチョーだけじゃなくて、ツバサにも。
ふざけるな、っていうのはボクのセリフだ！
なんなんだよ！　勝手にレースに混ざってきて！　ずっとボクの隣で走ってきて！
最後はボクよりも速くゴールするつもりなの!?
……認めない！　認めるもんか！
「こん……のぉぉぉぉぉ!!」
そこから先は必死になって足も腕も動かして走った。
カイチョーに負けるかもとか。レース終わった後はどうなるのとか。そんなのは頭に残ってなかった。
とにかく誰よりも前に出なきゃ。それしか頭に残ってなかった。
だけど、結局カイチョーには届かなかった。

「はは、流石はカイチョー……」
ボクの息も絶え絶えな呟きは、カイチョーには届かなかったと思う。
だって、ギャラリー席にいた皆がカイチョーに駆け寄ってワイワイ騒いでたから。
ボクが負けた。カイチョーが勝った。

だから、目の前のこの光景は当たり前のものだ。ボクが憧れたカイチョーのあるべき姿だ。
頭では分かってる。
なのに、胸の内側がイガイガする。
いつものカッコいいカイチョーを見ているはずなのに。
いつもみたいにボクも皆に混ざってカイチョーすごいね！　って言いに行けばいいのに。
ボクの足は動かなかった。まるで映画を見ているみたいに、ボクとカイチョーの間に越えられない線があるような。
「……大丈夫かい？」
「えっ？　あ……」
レース前に声をかけてくれたトレーナーだった。
なんだか心配そうな顔をしてボクのことを見つめている。
「ううん！　なんでもない」
ダメだ、ここで弱気なところを見せちゃ。ボクはムテキのトウカイテイオー様なんだ。
そう思おうとすればするほど、目の前のトレーナーの顔が見られなくなる。
「なんでも、ないよ……」
結局、ボクはその場を逃げる様に立ち去ることしかできなかった。

その日の夜。寮でじっとしてられなくなったボクは学園の外を走ってた。
いつもだったらいくらか走ればスッキリするのに、今日に限ってはずっと胸の内側のイガイガが取れない。
走って走って……もうヘトヘトになったけどスッキリしない。
「はぁっ、はぁっ……！　もう……！　なんでだよぉ……！」
足を止める。クタクタだけど、それがまた胸のイガイガを刺激する。
「トウカイテイオー？　こんな時間にどうしたんだ？」
ふと、ボクを呼ぶ声がした。

そっちを見れば、昼間のトレーナーだった。
「あ、キミ……」
やめてよ、その心配そうな目。今そんな目で見られると、余計にイガイガするでしょ。
「今、おしゃべりしたい気分じゃないんだ。じゃあね」
だから離れたかった。走ってしまえば、トレーナーは追いついてこれない。
なのに、ボクの足は言うことを聞いてくれなかった。
「っ!?」
足がもつれて、その場に転ぶ。
「大丈夫か!?」
トレーナーが駆け寄ってくる。差し伸べられた手を乱暴に払って、立ち上がった。
「ふんっ！　こんなのたいしたことないよ。ボクはランニングに戻るから、邪魔しないで！」
これでまた一人で走れる。そう思ったのに。
「これ以上無理したらダメだ！」
トレーナーがボクの前で通せんぼしてきた。
その瞬間、プチンと何かが切れるような感じがして。
「――うるさいなあ、偉そーに！　どいてよ!!　まだボクのトレーナーでも何でもないくせにっ！」
こぶしを握り締めてお腹の底から目の前のトレーナーを怒鳴りつけた。
邪魔しないでよ。放っておいてよ！　キミにボクの何が――。
「どかないっ!!」
ビリビリと体が震えるくらいの、ボクの怒鳴り声よりもずっとずっと大きな声。
目の前を見れば、ものすごく怒ったような顔をしたトレーナーがボクをにらみつけていた。
その姿に、急に心がしぼんでいく。
「う……な、なんだよ……」

怖い。意味が分からない。なんでボクが怒られなくっちゃいけないの。
「ぐすっ……なんだよぉ……怖い顔しないでよぉ……！」
もう何が何だか分からない。
ただ、ボクはみっともなくその場で泣くしかできなかった。
でも、トレーナーはそんなボクの傍で困ったようにボクをなだめてくれた。
しばらく泣いて、段々と気持ちが落ち着いてきた。
「落ち着いた？」
トレーナーが優しくボクの頭をなでる。子ども扱いされてるみたいでちょっと気に入らなかったけど、もう振り払うつもりにはなれなかった。
「うん……でも……まだ、わかんないまんまだ」
「わからない？」
トレーナーがボクの言葉に不思議そうな顔をする。
この人だったら、話してもいいのかな。なんとなく、そんなことを考えた。
「胸の、内側のとこがね。レースの後からずっと、イガイガしてるんだ」
右手を胸の前に持ってきて、汗でぬれた体操服をキュッと掴む。
「ううん……レースの前からだ。あの子が……ソライロツバサがボクたちのレースに飛び入り参加してきた時から……」
「ああ、あの栗毛色の髪の……」
「そうそう。でさ、レースが終わった後……カイチョーが皆から声援を浴びてるのを見て、もっとイガイガするようになったの」
そうだ。皆から褒められる、ボクの憧れるカッコいいカイチョーを目の前にしていたはずなのに。
「変だよね。ボクが憧れたカイチョーが目の前にいたのに……1番強くて、1番早くて、1番すごい。1番皆に褒め称えられてる」
初めて日本ダービーを見に行ったその日、ボクの目の前を駆け抜けていったあのカッコいい姿。

それからカイチョーのレースを見に行くたびに、カイチョーはボクの期待を超える走りを、強さを、速さを見せつけてくれた。
そうして周りの誰もが認めて、褒め称える絶対の〝皇帝〟……それがボクの憧れたシンボリルドルフっていうウマ娘だ。
いつかは、ボクもあんな風になりたい。
「カイチョーはボクが目指す姿そのものなんだ。そんなカイチョーを今日も見たはずなのに……」
胸のイガイガが痛い。
さっきまでどっかに言っていたムカムカした気持ちがまた戻ってきた。
「大体！　何なのさツバサは！　今日はボクとカイチョーの模擬レースだったじゃんか！」
そうだ。混ぜてほしいなんて言い出したツバサを見て、なんかイラっとしたのがそもそもの始まりなんだ。
「ずっとずっとボクの隣で並んで走ってきて！　ナマイキにボクよりも前に出ようと……」
その瞬間、レースの時の記憶がブワッと頭の中にあふれ出した。
そうだ。レースの最後。ありったけのスパートをかけたのにそれでもカイチョーに離されかかったあの時。
ボクは一瞬諦めた。勝とうって気持ちが消えてた。負けたって仕方がないって思った。だって相手はあのカイチョーなんだから。
でも、ツバサはそうじゃなかった。ふざけるな！　って声を張り上げて、最後まで加速しようとした。
そんなツバサを見て、ボクは負けたくないって強く思って……それで最後あそこからもう一回加速できたんだ。
もし、あの時ツバサがいなかったら。
そしたら、ボクは……。
ポタリ、ポタリとジャージに涙がこぼれる。
一度は止まった涙が、まだあふれ出した。
「そっかあ……」
ああ、このイガイガがなんなのか。その理由がちょっとだけわかっ

た気がする。
「ボク……負けちゃったんだぁ……」
カイチョーに負けた。そして、ソライロツバサにも負けた。
カイチョー相手に、ひるむことなく全力を出し続けられたツバサ。
同じことを、ボクは出来なかった。
確かに先にゴール板を駆け抜けたのはボクだ。
でも、それだけなんだ。スパートのタイミングはツバサの方が早かった。もしも実力が全く同じで、同じレース展開になったら……。
こんな想像に意味なんてない。分かってる。だけど、そう考えずにはいられない。
試合に勝って、勝負に負ける。今のボクにふさわしい言葉を選ぶならこれしかない。
悔しい。悔しい！
カイチョー以外のウマ娘に、初めて負けた。負かされた。少なくとも、ボクはそう思わされてる。
「う〝ぅ〝〜〜……！」
俯いて、ジャージをギュッと掴む。
そうしてまた、ボクはしばらく静かに泣いた。